

平成28年度

運営諮問会議報告書



平成29年8月

独立行政法人国立高等専門学校
鈴鹿工業高等専門学校

目 次

○平成 2 8 年度 鈴鹿工業高等専門学校運営諮問会議

- 1 平成 2 8 年度鈴鹿工業高等専門学校運営諮問会議委員名簿
- 2 平成 2 8 年度鈴鹿工業高等専門学校運営諮問会議次第
- 3 配付資料一覧
- 4 平成 2 8 年度鈴鹿工業高等専門学校運営諮問会議議事録
- 5 参考資料
 - (1) 鈴鹿工業高等専門学校第 2 期中期目標
 - (2) 鈴鹿工業高等専門学校第 2 期中期計画
 - (3) 鈴鹿工業高等専門学校平成 2 6 年度年度計画
 - (4) 鈴鹿工業高等専門学校平成 2 7 年度年度計画
 - (5) 鈴鹿工業高等専門学校運営諮問会議規則

1. 平成28年度 鈴鹿工業高等専門学校運営諮問会議委員名簿

【学外委員】

| 氏名 | 現職等 | 区分 |
|------------------------------------|-------------------------------|---------------|
| 井上 光輝 <small>イノウエ ミツテル</small> | 豊橋技術科学大学 理事・副学長（学務担当） | 高等教育機関及び研究機関等 |
| 山本 俊彦 <small>ヤマモト トシヒコ</small> | 三重大学 理事・副学長（教育担当） | 高等教育機関及び研究機関等 |
| 下田 徳重 <small>シモダ トクシゲ</small> | SUZUKA産学官交流会 会長 (株)フジコウ 会長 | 産業界及び地方公共団体等 |
| 中畑 裕之 <small>ナカハタ ヒロユキ</small> | (株)百五総合研究所 地域調査部長(主席研究員) | 産業界及び地方公共団体等 |
| 亀井 秀樹 <small>カメイ ヒデキ</small> | 鈴鹿市 副市長 | 産業界及び地方公共団体等 |
| 川口 宗弘 <small>カワグチ ムネヒロ</small> | 鈴鹿高専テクノプラザ 会長 ダイソウ工業(株) 会長 | 本校卒業生 |
| 後藤 敏博 <small>ゴトウ トシヒロ</small> | 鈴鹿市中学校長会 会長 鈴峰中学校 校長 | 本校に関する学識及び経験 |
| 井頭 清晃 <small>イガシラ キョウテル</small> | 鈴鹿工業高等専門学校教育後援会 前会長 | 本校に関する学識及び経験 |

(敬称略)

【学内委員】

| 氏名 | 現職等 |
|------------------------------------|-----------------|
| 新田 保次 <small>ニッタ ヤスツグ</small> | 鈴鹿工業高等専門学校 校長 |
| 井瀬 潔 <small>イセ キヨシ</small> | 鈴鹿工業高等専門学校 副校長 |
| 深津 一也 <small>フカツ カズヤ</small> | 鈴鹿工業高等専門学校 事務部長 |
| 江崎 尚和 <small>エザキ ヒサカズ</small> | 鈴鹿工業高等専門学校 教務主事 |
| 下古谷 博司 <small>シモフルヤ ヒロシ</small> | 鈴鹿工業高等専門学校 学生主事 |
| 近藤 一之 <small>コンドウ カズユキ</small> | 鈴鹿工業高等専門学校 寮務主事 |

2. 平成28年度鈴鹿工業高等専門学校運営諮問会議次第

日 時：平成28年3月24日（金）
14時00分～16時00分
場 所：鈴鹿工業高等専門学校 会議室B

1. 開 会

2. 配付資料の確認及び日程説明

3. 校長挨拶

4. 出席者紹介

5. 議 事

(1) 鈴鹿工業高等専門学校の概要について

(2) 平成26年度・27年度の自己点検評価報告書について

(3) 意見交換

6. 閉 会

3. 配付資料一覧

1. 運営諮問会議次第
2. 座席表
3. 運営諮問会議規則
4. 運営諮問会議委員名簿
5. 自己点検評価報告書
6. ポケットガイド
7. 学校概要資料

平成28年度鈴鹿工業高等専門学校運営諮問会議議事録

1. 開会

2. 配付資料の確認及び日程調整

3. 校長挨拶

新田校長：こんにちは。年度末の本当にお忙しい折、こうして運営諮問会議にご参加いただきありがとうございます。また、後藤先生には新たに委員にご就任いただきましてありがとうございます。日頃、色んな面で本校の運営にご支援いただいております、この場を借りてお礼申したいと思います。

さて、本会の狙いですが、本会議は本校の学校運営の充実発展に資することを目的として発足したものでございます。委員の先生方からは教育研究に関する基本的な計画に関する事項、教育研究活動の状況に関する点検評価について忌憚のないご意見や助言を承りたいと存じます。

また、本会では第3期中期目標期間のうち、平成26年度から平成27年度の2年間を自己評価しましたので、その面も対象にさせていただきたいと思います。

運営諮問会議は昨年度から発足したものですから、それから毎年行うようになりましたので、期間的に平成28年度はまだ出来ておりませんが、来年度に平成28年度分をやらせていただきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

あと、また学校概要を説明しますので、その時に最近の本校の状況を併せてお知らせしたいと思います。冒頭の挨拶、以上で簡単ですが終わらせていただきます。本日はよろしくお願いいたします。

4. 出席者紹介

5. 議事

(1) 鈴鹿工業高等専門学校の概要について

新田校長：それでは、僭越でございますけれども議長を務めさせていただきます。皆様方のご協

力を得て円滑に進行させたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

私の方は、本校の概要ということで、お手元の資料をもとに説明したいと思いますが、その前に最近の状況を少しご紹介いたします。

入試が終わりまして、今日は入学者のオリエンテーションをやっておりまして、来年度入学者が決まりました。志願者倍率は2.7倍で、昨年が2.8倍でしたので若干減少しました。志願者数的には564人から538人ということで26名減少しました。昨年、前年度より10名くらい増えましたので、今年度は、一昨年と同じ位の状況になったということが言えると思います。ただ、の中で特徴的なのは電気電子工学科が第2志望を採ったということで、定員は割れてないのですが、電気電子工学科の志願者が若干少なかったということで第2志望を採りました。この影響というのは、現在、東芝で色々言われている問題やその前のシャープなど、(学生は)非常に敏感に反映しますので、そういう結果かと思えます。

合格者数は、定員が200名のところを217名ということで、昨年も220名ちょっとということでオーバーしたのですが、これは意図的にオーバーしたのではなく計算式がありまして、その率でカウントしていったら最近高専に合格した人の歩留り率が高くなっている傾向がありまして、そういう理由で少し高くなりました。これは、もう1校、私、鳥羽商船を持っているのですが、鳥羽も同じような状況で、定員より若干多くなっております。

それから、高専を取り巻く状況、これは大学もそうですが、やはり予算面で非常に苦労しております。高専機構全体について言いますと、運営費交付金の基盤的経費は1%の効率化係数で削減されます。一般管理費が高専の場合3%かかってくるので年間4億7,500万、51高専で減ってくるということで、1校あたり、大雑把に言うと1000万円、減少していきます。これがずっと続いておりますから、非常に大変な状況になって、基盤的経費の中で人件費が占める割合がもう8割近くになりつつあります。その分、物件費がどんどん減っていきますから、教育研究に使えないような、厳しい状況が続いております。

ただ、一方で特別研究教育経費というのがありまして、競争的資金なのですが、これが文科省から財務省に働きかけていて、これで補って、全体の予算額は750億ちょっとでほぼ前年度並みになっております。この特別研究教育経費については、競争的な志向が強いので、各高専が手を挙げて取っていくのですが、本校は幸い、教職員の皆さんが頑張っていて、情報セキュリティやロボット関係の事業を取ってきております。現在も来年度に向けて高専4.0イニシアティブということで、あとで話がありますが、専攻科改組をしますので、グローバルエンジニアプログラム関係も含めて予算を取って来れないか、ということで今申請している段階です。

もう一つは、15歳人口が減っております。平成10年度から平成29年度をみてみますと、15年間で35万人、年平均で1万8,500人、約2万人減っています。これは

予想ですが、高専が1%をカバーしているという状況なので、200人が毎年高専単位で減ってきます。ということは1校分、志願者が減るという状況になります。ただ、幸い、最近少し減少幅が低くなってきております。また、一昨日、企画委員会があったときに最新のデータが出ました。国立高専の志願者数は15,591人ということで、15,600人程なのですけれども、前年が16,314人、16,300人程で、723名減少しております。これはちょっと危機的、というまでも心配事で、高専の志願倍率が中卒の学生の中で占める割合が1.74倍から1.67倍に下がっています。ということは、人気があるのでではなくて、陰り気味というようなことも言えるのではないかと、ということで、高専のPRをもっとしっかりしないと、というようなことを考えております。そういう状況の中で、先程も言いましたように、本校は色々と取り組みを進めておるということです。

それでは、鈴鹿高専の概要を見ていただきたいと思います。昨年度も来ていただいた先生方には同じような話になるところもありますが、その辺はご容赦願いたいと思います。

鈴鹿高専の沿革と現状では、鈴鹿高専の場合、一期校として1962年に発足して55年近くが経とうとしております。創設時は3学科体制だったのが、現状では5学科、専攻科が2専攻、これが来年度、1専攻3コースになります。そういう状況で2004年に法人化されて、これ以降、先程言ったように非常に予算面で厳しい状況が続いております。

その次を見ていただきますと、鈴鹿高専の基本的方向ということで、鈴鹿高専は「地域に根ざし、世界に羽ばたくクリエイティブ、創造的な人材を養成する」ということで、それを目標に頑張っております。

それから、教育理念は、「知・徳・体」を重視するというので、この建物の前にも「知・徳・体」の碑が建っておりますが、具体的にはそこに書いてある内容を意識しつつ、挑戦・創造ということに育まれる人材を育成しようということにしております。

それから、近年の鈴鹿高専の入試と志願者数については、先程言いましたので省略いたします。ここに書いてある内容は要約バージョンで後の説明とほぼ重複しますので、今は省略させていただきます。

その次の社会ニーズを踏まえたロボット人材の育成事業を見ていただきますと、これも先程言いました特別教育研究経費の平成27年度から3年間行っている事業です。社会ニーズを踏まえたロボット人材の育成事業ということで、大雑把に言いますと企業がロボット人材についてどういうニーズを持っているか、ということ把握して、ロボット人材を総合的に育成する教育プログラムを作ろう、ということで、その連携校、現在は9高専、北は釧路から南は北九州までやっております。この事業は来年度が最終になって、その後は自立的にやっていくという状況です。

それからその次が来年度発足する鈴鹿高専の専攻科の改組の概要です。今日、別紙で配っておりますがそこにより詳しく書いております。現在のスキーム図で2専攻体制から

改組後は1専攻で総合イノベーション工学専攻、その中に3コース、ここの定員は決めなくて割と可変的に自由に希望に応じてコースを選択できる。第一志望だけでもいいですし、ダブルでとってもいい、ということで環境・資源、エネルギー・機能創成、エネルギーは特に水素系を重視しながら、と思っています。あとロボットですね。それからこの専攻を貫くのが、本科からグローバルエンジニアリングプログラムという10人くらいの人材をこのプログラムに乗せてつくっていかう。これはもちろん国際的に、将来的に活躍できるエンジニアであったり研究者であったり、ここを出たら就職してもいいし、更に大学院へ行ってもいいというようなことで思っております。

それから次に在学生の状況を載せております。昨年の10月1日現在では、学科生が1,079名で女子は23.4%ということで、全国平均より女子の占める割合は若干高いです。

専攻科生は、次のように定員が20名のところをそれぞれ30名くらいずつ採っております。

それから入寮状況は、留学生7名を含めて324名ということで約3割が寮生です。

それから、その下に地域と学生の受入れということで、29年度の志願者538名中、鈴鹿市内は18%、99名、これは前年度より若干減少しております。鈴鹿を入れた県内は変わりません。県外が4%ということで、大体この辺、4~5%が県外です。そして入ってくる学生もほぼ同じような傾向を示しております。鈴鹿市内は中学卒業生の志願者が約5.1%、入学は2.0%ということで、先程言いましたけれども全国平均では1%弱が入学者の占める割合になっておりますので、本校の場合、地元生は約2倍の率を占めているということになっております。

卒業後の進路は、学科生の場合、1年おきに上がったたり下がったりなんですけど、進学率をみると、今年度進学するのは4割、39%です。前年度が48%、約5割でした。どこに進学するかというと東北大学、東京大学、東京工業大学、名古屋大学、大阪大学、九州大学、もちろん豊橋技科大学さん等々、という構成になっております。

求人倍率も20倍程度ということです。専攻科生のほうが進学率が高く、5割をちょっと超えました。各大学院に行っております。

それから学生の就職状況の地元率については、平成28年度学科で県内就職率29%ということで、地元の定着率を高めよ、と言われていたのですが、前年度は35%。ほぼ3割ということで推移しております。愛知県を含めると相当数行くので、三重県だけに限るとこういう状況なのですが、全般的には結構近隣に就職しているのではないかな、と思います。

それから12枚目のほうは、学生の活躍の状況を示しております。エコカープロジェクト、ロボコンプロジェクト、プロコン（プログラムコンテスト）、プロジェクト関係で大きなのがこの3つで、それぞれ全国規模でコンテストが行われます。エコカープロジェクトではそのサーキットを使うケースもあります。Ene-1GP、KV-1クラスとい

うのは、単3乾電池、40本でサーキットを3周するんです。それで優勝ということで。本校の場合、このエコカープロジェクト全体で今年度の高専機構の学生表彰をもらっています。

それから、プロコンプロジェクトも最優秀賞とかありますけれども、高校生を対象としたパソコン甲子園のモバイルグランプリで優勝して、これも機構から今年度、学生表彰をもらうことが決まりました。ロボコンは残念ながら全国に行けず、地区大会止まりという状況になりました。

あと文化的なところで、作文も皆さん頑張っていたいて、三重県の最優秀賞や学校自体も学校賞を日本福祉大学からもらっております。

英検等も工業英検で文科大臣賞を1年生がもらい、本校は団体でもらいました。

それから、13枚目のところは、全国高専体育大会ですけれども陸上競技でだいぶ頑張ってくれております。他にもここに書いてある内容です。特別に書いてあるところでは、本校の卒業生でAGF鈴鹿勤務の衛藤君がリオのオリンピックに行きまして、今も本校で練習しております。船越先生がコーチで、この前も海外遠征に行ったということで、東京オリンピックに向けて強化選手として頑張っている状況です。

次に写真が色々載っておりますので、見ていただきたいと思います。

それから、国際交流のほうは米国のオハイオ州立大学、カナダジョージアンカレッジ、中国常州信息職業技術大学、こことは協定を結んでほぼ毎年、行っております。中国常州とは行ったり来たりですが隔年おきで交互にやっております。現在、ドイツの2校、ハノーファー大学、ブランデンブルグ工科大学と協定を準備中で、来年度早々、夏までに協定が結ぶことができればいいなということで準備しております。

留学生は先程言いました。それから社会連携・地域貢献等はこういう状況ですが、ここで記入漏れというか、書いたんですが隠れてしまったので、鈴鹿産学官交流会等々、筆頭に書いておりました。あと、鈴鹿産学官交流会、鈴鹿高専テクノプラザ、ものづくり体験教室等、色々やっております。特に最近では小中学校への出前授業にも力を入れてやっておる状況でございます。

それから、鳥羽商船との連携。

それから、第3ブロックといいますのは、東海・北陸・近畿の高専と一緒に頑張ってもらおうということで、チームを作っております、その校長会を定期的にやっておるという状況です。

大学との協定は、豊橋技科大学さんと私の母校の大阪大学の工学部・大学院工学研究科と協定を結んで、インターンシップや進学の色んな事、共同研究等やっております。

以上で簡単ですけれども本校の概要を紹介させていただきました。どうもありがとうございました。

もし質問、ございましたらお願いいたします。

それでは、続きまして井瀬副校長から自己点検評価報告書について説明いただきます

のでよろしく願いいたします。

(2) 第2期中期目標計画期間の自己点検評価報告書について

井瀬副校長：では私の方から、平成26年度と平成27年度の年度計画に対しての赤い冊子のまとめ、それは、平成26年度と平成27年度なんですけど、今どうしているかというところも少し含めながら、説明させていただきます。

1番目は、教育に関する事項ということで、6項目並べておりまして、この後、研究、国際交流、管理運営、業務運営というような順で話をしていきます。

まず、教育に関する項目の中でも入学者のほうなんですけれども、入学してくれた学生をうまく育成して輩出できているかということはいつも調べています。ちゃんと入ってくれて成績も良く出て行ってくれているのかを調べながら、うちの入試のやり方は上手いのかどうかというのも検討しています。入試改革検討ワーキングを設置しまして、入学時の成績、中学の成績と高専の成績を調べて、入学の方法は概ね悪くない、つまり、大体卒業してくれているという感じ、ということ調べています。時々、入ったけれども合わない子たちもいます。そういう子たちがどのくらいいるのかということ調べて、相関等を調べています。図の中で学力というのは学力だけで入学した学生、それから推薦は推薦で入学した学生、推薦学力というのは推薦を落ちて学力で入学した学生を示しています。そして学籍移動というのは、3年生になったとき、入学時の学生達と一緒に進級してるかというような意味です。例えば、このクラスは46名で入学したけど、3年生の学年末では44名になっています。2人ほど学籍異動があったのですが、その内1名は学力で入った子であり、もう1名は推薦で入った子でした。そういうのを最近の5年間調べてみると、推薦のほうは約1割の学籍異動があり、学力の子たちはやっぱり公立高校を落ちてという子たちもいますので意気込み等もあるかもしれませんがちょっと率が高く、約25%の学籍異動が出るような感じですよ。

井上委員：在学者に対しての留年ではない？

井瀬副校長：留年も含めてです。

井上委員：4年生に上がれなかった人ということ？

井瀬副校長：そうです。みんなと一緒に、ということです。

で、色々やってきたんですけど、まずまず、今の入試のやり方で悪くはないかなと思っております。

次はですね、大学のほうでは3つのポリシーは公にされていると思うのですが、高専の

ほうも今年の3月までにこの3つのポリシーを公にしなさい、というのがでまして、この3月にむけてHPのほうに公開いたしました。

まずは、ディプロマポリシーのほうで“こういう人材を輩出しますよ、育成しますよ”というのがあって、カリキュラムポリシーで“こうやって勉強します、教育します”というのがあって、アドミッションポリシーで“入ってくる時はこんな人を受け入れます”っていう順番で書くんですけども、まずは、中学生の気になることを訴えたいので、ここではアドミッションポリシーを1番目に書いています。学科ごとにずっと書いて、次にディプロマポリシーが続きます。最後にカリキュラムポリシーと続きます。これらが3月中に成立できましたのでお知らせいたします。

次に、これはですね、志願者に向けた取り組みで色々、広報、広報誌、HP等で行っておりまして、平成26年度、平成27年度の推薦の人数は、18名程度が5学科ですので90～100名くらいが推薦で入ってくる学生なんですけど、大体2倍くらいの人数の約180名の応募がありました。学力のほうは100名程度の入学者のところを430名から460名が受験してくれるという感じです。平成27年度でちょっと頑張って30名程増えたんですけど、また平成28年度でちょっと減るとかこういう繰り返しをしています。

次のところは中学生に体験プログラムを通して入学者の確保をしているというところなんです。特にものづくり体験教室、これは夏と春とにやっているんですが参加者の多数の方が受験して、3割5分位が入学していただけるのでこれはもういい取り組みということで、学校を挙げて取り組んでおります。

今日、パンフレットで高専女子百科 Jr. ができましたので配らせていただきました。女子の受け入れ、たくさん学生を入れたいと思っていまして取り組んでおります。

それから、英語のほうも中々力を入れていまして、本校の4年生を対象にTOEIC600点以上を取った学生を表彰するのを平成26年度から始めました。前もって表彰するよと言っておいたんですけど、頑張ってくれまして、これが内数ですけども、700点を超える、800点を超えるという子も出てきて、年をかけるごとにその人数が増えているという嬉しい状況です。それから、本校の中でTOEICのIPを受験することができまして、年4回開いています。この3回目だけは4年生全員が義務的に受験ということで、その結果は色々なことで使っています。目標は二十歳で600点を目標にして、4年生の時点では19歳で二十歳の1年前になりますが600点を超えた子には表彰、ということをしております。

これが教育改革の見直しのところでお配りしました高専の高度化の中で本校はまず、専攻科の高度化をしましょうということで、2専攻だったのを1専攻3コースにしたところなんです。また、パンフレットを見ていただければと思います。狙いは、この時代にどういう人材を育成したらいいのか、というところから始めまして、幅の広い人材を出していきたいということで、大きな幹はあるんだけど、枝をいっぱいつけたような人材、機械工

学科のことは十分修めたけれど、それ以外に情報もできるよ、とか電子工学もある程度分かるよ、とかそういうような人材を出していきたいと思っていて、高専の高度化に取り組みました。

今、校長のほうからもありましたけれども、ロボットの人材育成のほうを重点的にやっております。産業のコメと言われていたマイコンですけども次の時代はロボット関連ではないかということで、このハード系、それからAIやIoTと情報系もソフト系も含めながら、次世代の産業のコメということで頑張ろうかと思っています。

それからもう一つは、待ったなしのセキュリティ関係です。サイバー攻撃の脅威にさらされているこの頃ですけども、これが高専の取り組むいい題材と言うか、日本の中で少し遅れている部分です。高専には特化した人材が結構いますので、高専を挙げて取り組むいいアイテムじゃないかと思っています。本校は今年から実践校として名乗りを挙げまして、目標は3年間で全員が情報セキュリティに強いエンジニアとして出ていくことと、情報セキュリティに特化した人材を育てるということでやっています。

それから、創造教育のほうを推進して、先程、校長のほうからもありましたけれども、ロボコンは平成26年度、平成27年度と全国に行って活躍しています。S評価をつけています。

プロコンのほうも全国で活躍して、先程のパソコン甲子園でグランプリ、これは機構のほうからも表彰されて、平成27年度、平成28年度と2年続けての表彰ということで頑張っています。

エンジニアリングデザイン教育は、まだ解決されていない課題を見つけるところから始めて、これを解決する力を育てる、ということで取り組んで、そのためのプロジェクトを5つ用意しています。これは第1学年から参加できるようにして、先程のような人材を出していきたいと思っております。

教員のほうは女性教員の積極採用をして、女性限定の教員公募も行いました。それで、平成27年度に2桁になりまして、平成28年度は更に一人、来年度は4人増える予定になっております。このように平成26年度で全学科に女性の教員がつくことができ、平成27年度には2桁になりましたが、人数としてはもう倍くらい要るかなと私は思っております。やはり数は力がありますので、数があればもっといいなと思っています。

教員の表彰のほうですが、平成27年度まではBがついているのですが、いまだ改善の余地がみられるということで、今年度、新しく表彰の評価の仕方を変えました。これまで教育がほとんど100%でしたが、やはり、校務、課外活動、研究、地域、国際貢献、こういうところも含んでの評価ということを今年から始めまして、今年はこの評価で初めて表彰を行いました。

ルーブリックをやらなければ、ということで、ルーブリックがどんなものかといいますと、例えば数学で言うと、数学は項目がいっぱいあるのですけども、三角関数、微分だとか積分だとかその項目ごとにどのくらいが出来たらよしとするかっていうのを細かく作

るやつです。それがちょっと出来ていなくて来年度完成させたいと思っています。

インターンシップですけど、これは取り組みに力を入れていまして、卒業までに8割が参加するようにと決めています。平成26年度、平成27年度も8割以上ですけれども、詳しく見てみると各科によって違いがあります。これは4年生で行くんですけども、平成28年度は力を入れていまして、ほとんどの学生がインターンシップに行っています。大体、実働5日のところに行きますが、10日行く学生も1/4くらいはいます。

それから、学生支援のほうですけども、心と身体健康調査、それから、Q-U、聞きなれない言葉かもしれませんが、クラス内における学生の状況がどんなか分かるようにするテストです。それから、体罰、いじめに対するアンケートもしていまして、これを全学年取り組んでいまして、学級担任の資質の向上等を図っております。Q-Uというのは、学校生活への意欲、学級の中での満足度、クラスの中で一人離れていないかとかそういうのをみるテストです。これを見まして、担任の先生は学生への対応とか学級の経営、運営に使っています。

心と身体健康調査のほうは、調査後、問題あるかなという学生には教員あるいは専門員とかに相談、面談をして対応するようにしています。

就職、進学のところですけど、これは皆さん100%行っていますので、よくできているかと思います。進路をみていきますと先程校長のほうからもありましたけれども、6割を超える年と5割の50%台、60%台が交互にでていまして、どういうことかなと思ひまして過去のところを見てみますと、24年くらいからこの傾向になっているんですけども、その前は50%台でリーマンショック後に入った学生が就職するときになって60%になっておりまして、リーマンショックが関係あるのかな、というような感じがみえます。進学のほうは就職が6割以上の年は成績が下がったかなと思ひましたが、そうでもないな、というのがわかりまして。これは、進学者ではなく、合格者の数です。2つ3つ合格している強者もいるので、進学者はこの数字より少なくなります。豊橋技術科学大学さん、三重大学さんにはいつもたくさん編入学生を引き受けていただきましてどうもありがとうございます。

校門のところを見ていただいたかと思いますが、木で見えにくかったのをフェンスに変えまして、見通しよくなりました。以前は高専前の敷地は草原だったのですが、現在は住宅地になり、自動車の数が増えて危なくなったため、改修を行いました。

それから、出来ていないBのところなんですけれども、今後10年を見据えた施設整備検討部会を立ち上げなさいと校長先生から言われているのですが、それが出来てないままです。Bをつけています。

安全のほうでは、AEDの講習会を3年で一巡するように教職員が受けています。実はこれが今年の3月に非常に役に立った、というようなことがありまして、やっていたよかったです。なと思ひました。

それから、男女共同参画の取り組みで、女性の教員は増えてきたんですけども、そこ

に係る環境整備ということで、イノベーション交流プラザの2階に男女共同参画エリアを作っていたのですが、その使い道が未整理ということでBをつけました。

研究に関しては、科研費申請80%、採択40%を目標にしているのですが、申請が26年度は50%、27年度は60%、28年度70%になりましたので、来年度は達成できるのではないかと考えております。採択のほうはまだ低いのですが、まず申請のほうで目標を達成していきたいと考えております。これが、現状の獲得している状況です。

パテントコンテスト、特許のほうも学内でパテントコンテストをしまして、ちょっと応募が少なくなってきたのでBをつけさせていただきました。平成26年度には文科省のパテントコンテストの中で特許出願支援対象者といういい賞をとりましたが、続かないのでBをつけさせていただきました。

それから国際交流、先程校長からもありましたけれども、アメリカ、カナダ、中国、ドイツをしまして、実はアメリカのオハイオ州立大へは、4～5年生が行くことになっているのですが、やる気のある3年生から行くのはどうか、というのを検討しております。後は、国際交流でも海外へのインターンシップを積極的に奨励しています。28年度はトビタテ！留学JAPAN日本代表プログラムに応募して、専攻科生、大学生の部の地域人材のコースで1名、高校生人材コースで1名の計2名行くことが出来ました。

Bがついているのがもう一つありまして、情報セキュリティ関係ですが、IT資産の管理のところソフトウェアの管理が徹底されていないということもありましてBをつけています。

少し話が戻りますが、これが、3年間の志願者の地域別です。津市や鈴鹿市、四日市市でも増減があり、その理由が中々読めませんが、やはり鈴鹿市に愛されないと困りますので、定常的にたくさんの鈴鹿の方が受験してくれるような取り組みをしていこうと考えています。平成27年度で26名増えて頑張ったなと思っていたら、次の年で24名減りまして、やはり、定常的に維持していけるように頑張ろうと考えております。

先程も校長のほうからありましたけれど、来年度からの運営諮問会議はその年度内に行えるように頑張っていきたいと思いますので、来年度もよろしくお願いいたします。

以上です。

新田校長：それでは、今の副校長の説明を受けて学内の委員さんから関連の補足説明があったらお願いいたします。よろしいですか。

それでは、予定では質問等はコーヒータイムの後でということですので、ここで休憩させていただきますと思います。開始は15時10分からということでよろしくお願いいたします。

(3) 意見交換

新田校長：それでは、ただいま説明がありましたけれどもそれについてご意見やご質問をいただきたいと思います。順番に聞いていき、一巡終わって時間がありましたらまたお伺いしたいと思います。では、名簿の順番で井上先生からお願いいたします。

井上委員：それでは、簡単なところから少しお話を伺いたいのですが、学生の支援というところで今回お話をいただいたのですが、確かに色んな取り組みが高専でも大学でも行われていると思うのですね。カウンセラー含めてやっていると思うのですが、このとき受け身のほうから思っていて、ちょっとうまくいかない学生さんがいるとするとどうやってケアしようか、というほうのお話にかなり力が入っていると思うんですけれども、一方、積極策として、こんな風なキャリアを描いて人生生きていったらいいんだよ、という風なキャリア教育というのは今、どれぐらいされているのでしょうか？

井瀬副校長：これまでは、5年生の自分の経験、就職や進学した時の経験を4年生、3年生に自分で語るっていうのをやっております。

井上委員：学生が行っている？

井瀬副校長：ええ、学生が。去年もやりました。いっぱいやっている取り組みの中で、学生が学生へ話しをするというのは珍しいかなと。学生から学生に自分の経験を語る、ということのをこれまでは4年生と3年生にまでやっていたのを、2年生、1年生まで広げようと思っています。それから、各科基本2名ですけれども、OB、OGを学校に招きまして、自分の時はこう考えて就職や進学を考えたとか、今、その会社に勤めてどういう風な経験をしているっていうのをOB、OGの立場でしゃべってもらっているのをやっています。毎年、各科2名ですけれども。白木原先生が男女共同参画でお金をちょっと稼いだ年など、“何名でもいいよ”とか、“旅費のかかる遠いところからでもいいよ”、というのはやっております。それから、1年生から5年生までの1年間のキャリア計画を一覧表にして毎年作って学生に渡しているのですが、やはり1年生、2年生がちょっと弱く、4年生ぐらいからダウンとイベントが増えてきます。できれば低学年から自分のキャリア設計を考えて欲しいと思っていて、高学年から低学年に経験を伝えるっていうのを広げていこうと思っています。

井上委員：私、この間、シンガポール大学に3日間、カリフォルニア大学サンディエゴ校へ2週間行って、大学のマネジメントを色々勉強してきたんですが、シンガポール大学っていうのは、科目としてキャリア教育というのが設定されていて、1年生で入った時に全学の学生をグループ化して、プロフェッショナルの講師を雇って、自分たちのキャリアプランを持って行って考えさせる、そういう教育をやっていますね。それを見て、豊橋も来年

度に向けて1年生と3年生の入った直後に7回で1単位、必修科目でキャリア教育をやるかなと。やっぱり受け身でやっているると本当に弱い学生が増えていて、いくらカウンセラーを雇用してお金を取るようにしても、ダメなんです。どんどん増える。寧ろ、入ってきたところで自分がどういう風に設計をして考えていく、もちろん、在学生とかOB・OGも呼んでやるのですけれども、必修科目で、もうやろう、というのを決めました。そういうことで、ご質問させていただきました。

江崎教務主事：(講師の)先生はどこから？

井上委員：プロを非常勤講師で雇ってきます。日本で言うと、例えば就職関係のリクルートとかですね、ああいうところはそういう人がうなるほどいるよ、という話なのでこれから探すところです。

新田校長：参考にさせていただきます。それでは、下田さん、いかがでしょうか。

下田委員：昨年初めてこの場に参加させていただきました、今年で2回目ですけれども、印象としましては全体的に評価点数が非常に良くなったという、内容はもちろんよくなっていると思うんですけど、詳しくはわかりませんが、評価方法が変わったのかな、ということくらいですね。Cという評価がなくなったということで非常に良かったと思いました。

新田校長：ありがとうございます。中畑さんいかがでしょう。

中畑委員：以前の会議で確認させていただきましたが、それから産学共同研究推進、耐震化など前回より進めていただいたのかなというところではございました。就職とかどうなのかと聞いていたら先程のお話の中で内容をお伺いしました。

また、アクティブラーニングはどんなことをしているのか。経済的に困難な学生さんが増えていると思うのでこの辺り、奨学金の給付状況とか教えてもらえたらと思います。以上です。

新田校長：ありがとうございました。では、アクティブラーニングは教務主事のほうからお願いします。

江崎教務主事：授業のやり方として、昔ながらの黒板に書きながら教えるのではなく、学生に考えさせる、グループでミーティングをさせて、意見をまとめてプレゼンテーションさせる、というようなスタイルがアクティブラーニングです。実は高専機構からもアクティ

ブラーニングを薦めるよう指示がきておりまして、東海・北陸・近畿の高専、全部で11高専あるんですけども、そこで、アクティブラーニングのワーキングが立ち上がっており、鈴鹿高専からも2名の教員が参加しています。そこで得た情報を学内に広めるという活動を始めたところです。鈴鹿高専の中でアクティブラーニングが広がっているかというところとそれほどまだ広がっていない状況です。ただ、アクティブラーニングの定義自体がどんなレベルをアクティブラーニングと言うのかということで、私もアクティブラーニングの研修会に行き、勉強してきました。兎に角、一方的に前でしゃべっているだけではなく、学生が考える時間を作ってやる。学生も一人で考えるのではなく、グループを作りながら与えられた課題を考えるということでした。そこで、低学年の授業の中で実践しています。具体的にはそれほど大変なことではなくて、ある程度基本知識を教えておいて、それに対して1つ問題を提起します。そして机を移動してグループを作り、解答を相談して考えてもらう、というスタイルで始めました。確かに、居眠りする子がゼロになりました。そして授業評価のアンケートの点数がグンと上がりました。やり方を一つ変えるだけでもものすごく効果があることがわかりましたので、これからもっと広めていきたいと思えます。

井瀬副校長：奨学金につきましては、こちらを見ていただくと、いきなりここ、平成25年度で少なくなりました。4年生になると就学支援金がなくなりまして、その子たちがもらうっていうのが、ここから減っていったこんなになったんだと思います。奨学金の中でも全額と半額の授業料免除っていうのが充実していて、ほとんどもらえています。

それからアクティブラーニングは、創造工学という4年生の科目で半年間グループを作って、「今無いもの」を作るということをやっています。これは4年生にさせている本当のアクティブラーニングですけども、低学年の2年生に、アクティブラーニングを活用した基礎科目、ミニ創造工学というのを行おうとしています。今年入ってきた学生が次の年なので、来年か再来年度になってしまいますが、低学年にもそういう授業を入れようとしています。

新田校長：経済的な困難者についての奨学金貸与状況、授業料免除状況については、調べてもらいますのでお待ちいただけますか。私の感触では、全国にもでておりますけれど、鈴鹿高専は相対的には高専の中ではそういう面では恵まれているほうじゃないかなと思っています。割と奨学金貸与は希望者自体が少ないです。では、川口さんお願いします。

川口委員：私は卒業生ですので、教育の中身に関して言いますと、私の時代とはだいぶ中身が変わっていると感じました。それだけ十分な教育を受けた学生が就職するのは、三重県内が20%くらいですかね？

江崎教務主事：30%です。

川口委員：30%ですか。それで、採用するのは80%が津・鈴鹿・四日市方面の三重県からということだったんですけれども、就職する率をもう少し三重県に返してもらえるようにしていただけないかなと。高専の中で、地元へ就職させるという意識があるのかどうか、ということの一つの目標を立てて頂けると嬉しいなと。と言いますのは、我々三重県でやっています中小企業ですけれども、例えば、両親がわが社に就職します。この子息が再度、わが社へ入社してもらおう、というのを狙っています。地元から学生をたくさん採ろうと思うとその両親が地元に戻っていて再度自分の子供を鈴鹿高専に入れようとするローテーションが出来たらな、と。優秀な人材を三重県に留めておきたいという思いがあって意見させてもらいました。よろしくご検討お願いいたします。

新田校長：希望的には、全国的に高専だけじゃなく三重大学もそうですけれども、地方の活性化、人口減への対応もあって、日本の将来どう考えるか？というのもあって、地域の重要性を訴えられているので私としても地元に戻っていただけたらとか、地元に着いていただけたら、というのを思っているところです。ですが、私もそうですけど子供の時は外に出たい、一回りも二回りも大きくなっていずれまた戻ってくるというのがありますから、長い目でみていただいて、すぐ就職する子はする子で、Uターン、Iターン、Jターンで魅力を確認し、総合的に考えられたら良いかな、と思っています。ただ地元で魅力的な企業がないと戻れないので、その魅力的な企業をどう作るかという、鈴鹿高専で先程も言いましたけれども、地域で世界を見れるような企業になってもらったら両方同時に見れるので、国際的な人物を我々輩出していますから。それと地域で両方やれますから。そういう方向にいけないかなと、ちょっと思っています。頑張りますので一緒にやりましょう。何か補足はありますか。

江崎先生は鈴鹿で育って鈴鹿に戻られているのですが、どうですか。

江崎教務主事：今、三重県自体が県を挙げてそういう動きをしています。三重県内の高等教育機関を出た学生を少しでも三重県に残したいとの願いから三重大学が核になって活動しています。三重県に就職する学生の数を10%向上させるという目標を挙げているところです。大学によっては殆どが三重県に就職します。例えば看護系とか教員とかですね。高専も魅力のある会社が地元がたくさん有れば就職するのですが、やはり親御さんも自分の子供を就職させようと思ったら、安定していて名前を通った大企業へ入れたいと思いますからね。たまたま、鈴鹿高専はそういう企業から求人がたくさん来るのでどうしても地元よりそちらに行ってしまう。学生自身も三重県にどんな会社があるのかよくわかっていない、ということもあるので、学生が在学中に三重県の会社を知る機会を積極的に

作ってあげれば県内就職者も増やしていけるのではないかと思います。

新田校長：後藤先生、いかがでしょうか。

後藤委員：昨年度の前川校長先生も同じような意見を述べられたと聞いておりますが、推薦入試のハードルが高い、と。優秀な生徒でも落ちてきてショックを味わうので、なんとかもう少し改善が出来ないのかなど。先程、入試のことが話にありましたが、平成20年ごろから変わっていない。三重県の県立は推薦がなくなって前期と後期になって改善されています。推薦は面接ということで、中学校ではすごく面接に時間をかけて練習し、多くは優秀な子なので、手ごたえを感じていたのに落ちてしまい、落ち込んでしまう。県立の前期で神戸高校の理数科の入試は、面接と英語、数学の試験で、この場合、内申があまり良くなくても、英語と数学の成績が良い子は受かる。何かそのようなわかりやすい制度を考えていただけないかと思います。今度の中3になる子たちから大学入試が変わるので、中学校の学習指導要領も変わる。それに伴い、入試制度も変わってくると考えられるので、その辺りをもう少し改善していただければ、と思います。

生徒募集については、地元の学生が中学校で話をするのが効果的なのではないか。本校（鈴峰中）では、県立の後期入試の日（県立高校生は休み）に地元出身の高校2年生に話をしてもらっています。高校2年生になると説明も上手で、学校のPRもしっかりできますので、身近な先輩の高校生活を理解出来れば大きな宣伝活動になるのではないのでしょうか。

新田校長：入試制度について江崎先生お願いします。

江崎教務主事：推薦の入試についてなんですけれども、確かに推薦で入試をされる皆さんは物凄く準備をされて面接の準備をされて臨まれていることが、実際に面接をしていると非常によくわかります。おそらく面接で聞かれるだろうことを準備してきて、皆さん同じようなことを話します。同じ答えということは、個性が感じられないのでそこで差がつきにくい。そうすると、評価基準として、まず内申点があってそれに面接点となります。次に何が基準になるかという、中学校時代の活動記録、クラブ活動や生徒会です。内申点はすごく高くても、クラブ活動をしていなかったとなるとどうしても総合得点が低くなってしまっていて、どんなに高い内申点でも合格できないこともあります。非常に忍びないのですけれどもそういうケースがたくさんあります。推薦を目指すのであれば、成績だけではなく、いろんな分野で活躍している生徒がかなり高く評価されます。

あと、入試の制度につきましては、学力試験のほうは今年度以降、大学も高専も全てアドミッションポリシーを明確に掲げてそれに沿った入試をやることが要求されています。ですから、次年度の入試は、今の入試制度に少し手を加えて変えざるを得ない状況になっ

ております。なるべく早い時期にどういう風に変わるか、その中でいろんな能力を際立たせるような、内申の点数を傾斜配分するとか、学力試験の点数を傾斜配点して能力のある子を入れる、といったようなそういう工夫を来年度の入試に反映できるよう予定しています。

学生が自分の出身校に行って、説明会をするのは非常にいいことだと思います。把握はしていませんが、何名かは中学校の先生から呼ばれて行っているようです。そのようなことは、こちらから行ってもいいかという要望をしてもよろしいのでしょうか？

後藤委員：是非、お願いします。ちなみに県立の高校の後期入試の日は、県立高校生は休みで中学校に呼びやすいのですが、高専は休みですか？

江崎教務主事：春休みです。高専の春休みは2月の半ばから4月初めまでと、長いですからいつでも大丈夫です。

新田校長：大いに行きますので。こちらからお願いしてもいいし。ただ、この前、三重県の県教委と交流の場を初めて持ったんですけれども、先程の進学率や進学先を見せましたら、競争相手として高専のことを警戒しだしています。

後藤委員：（女子学生を増やすのであれば）それこそ、女の子を派遣してもらったら女の子は上手に話しますので、是非。

江崎教務主事：積極的に検討させていただきます。

新田校長：中学校の立場としては、育てた優秀な学生が（高専を）希望すれば、当然、高専に入って欲しい、と。県立高校は絞っているのだから倍率低いですから落ちる子は少ないですが、高専は2倍以上の倍率で半分は落ちます。そういう中で、気持ちは非常にわかるんですけれども、今、高専が抱えている全体の話は、定員が全国的に1万人、ところが、先程言ったように中学卒業生はどんどん減ってくる中で20年来定員を維持しています。そうしたら、放っておくと質が下がるというか。質を維持しようとしたら定員を増やすわけにはいかなくて、5年、10年後には逆に絞り込まないと今、優秀な人材を輩出していると言われている高専が質の維持を保てなくなる可能性がある。その辺との矛盾がありまして。また、個人的に言いますと高専としては三重県下では鳥羽商船もありまして、私は両校の校長をしています。鳥羽と今、議論しているのは、鈴鹿と鳥羽の併願のようなことをやれないかと。はっきり層が分かれていますから、鈴鹿を落ちた学生が高専らしい教育を受けたかったら、鳥羽でも教育できると。そっちも行ってもらったら非常にいいのかな、と。鳥羽の場合、逆に85%が推薦と体験で採っています。そうしないと定員が維持でき

ないような状況もあるので。ただ出ていく学生は結構立派に育てて20倍の倍率の中で行っていますから。出口は結構保証されているんですけれども。というわけで、ご理解いただけたらと。

では、井頭さんお願いします。

井頭委員：子供を2人お世話になりありがとうございます。1年前、上の子が専攻科修了いたしましたして、奈良先端科学技術大学の大学院に行っております。下の子は1年間休学させていただいてまして、先日復学の許可が届きましたので、また4月からお世話になりますのでよろしく願いいたします。2人の子供を高専でお世話になった経験から、高専の魅力としてPRのネタに使っていただけたらと思います。まず、学費が年間23万円と安い。高校と比べると高いんですけれども、国立大学の学費が年間56万円くらいですので4年生、5年生、及び専攻科になりますと半額以下になります。うちは県外なので寮に入れさせてもらっているんですが、寮費も年間を通じて10万円もかかっていなかったと思います。食事朝昼晩、専用の食事がついておりまして、およそ月1万5千円くらい。また、5年間みっちりありますので、クラブ活動や自分のやりたい活動が慌てることなく非常に落ち着いてやれるということが素晴らしいところかなと思います。また、2人も1年間、専攻科を休学させていただいて、また受け入れていただけるということは、海外や語学へご理解いただいているということで、非常にメリットかなと考えています。もう一つ、恥ずかしながら下の子は推薦で落ちて学力で入ったんですけれど、受検料を1回払うと2回目は払わなくていい(同じ受検票が使用できる)というのも非常にメリットに感じました。あと、上の子の就職活動が始まったところですが、5年生で一度卒論を書いて学会等も経験し、専攻科でもまた卒論、大学院に入りますと論文を複数本、トータルで少なくとも3回になります。その間に海外含めて学会等々かなり行かせていただいているところです。通常、大学卒で就職活動する方は、まだ卒論が始まっているかどうかの時期で社会と向き合わなければならない。それに比べますと既に経験を持っている、自分に研究の成果や実績があるわけですから、その人の持っている土台が違うから非常にメリットがある。理系の学習という内容につきましては、高専は大学と比較してカリキュラムに何の遜色もございませんので、高校から大学を狙うより、高専から専攻科、大学院というルートもメリットだろうと思います。是非とも学生募集の時にネタにお使いいただければ、と思います。

新田校長：ありがとうございます。色んな長所をまとめていただいて。私も常に頭に入れて宣伝させていただきたいと思います。先程おっしゃられた15歳からの教育というのはこの前も校長同士で話して、セキュリティ人材とかロボット人材というのもこれからは15歳くらいからやっついていかないと中々伸びないと。世界的にも通用しないという話があって、そういうことに興味を持っている学生は本当に高専に入っていたら、早

めに教育できるな、と思っています。

それでは、全体を通してご意見、ご質問等ありましたら伺いたいと思います。

井上委員：60年くらい前、高専が設計された時に国会で、なんで大学の工学部があるのに高専を作るのだという質問に、当時の文部大臣は大学の工学部を高速道路に例え、高専は国道に例えられて、仮に技術者教育としての高速道路が通れなくなった時でも、国道が技術者育成を支える意味で必要であると答弁されています。今の井頭さんの言われた高専教育の複線化から考えると高専教育、正に60年近く経って素晴らしいものになったな、と感動して聞いていました。私も高専卒ですので非常に良かったなと思います。それと、地域への還元で先程お話があったんですが、地域創生人材の育成というのはかなり国が力を入れていて、特に高専の本科と専攻科、両方ともやはり地域人材をどうやって作っていくんだ、というのが国のほうも気になっているところだと思うんですね。それで、ご存知のように内閣府が平成29年度、「まち・ひと・しごと創生」というので内閣府から直接地方公共団体にお金がドーンと降りてくるんです。その時のコアが地方大学なので、地方大学ということは、各県ほとんどに高専がありますから、当然高専も地域人材を担っているんで、これから高専に対して地域人材を育成するんだというキーワードでいろんな情報が入ってくるのではないかなと。特にこの地域ですと三重大学さんがかなり積極的に地域連携をやられていて、特にベンチャー企業の掘り起こしなどをやられているので、その辺りで連携されるといいんじゃないかなと思います。以上です。

新田校長：ありがとうございます。またいろいろ教えてください。他にはないでしょうか。

井頭委員：企業サイドからの要望として、うちの会社は研究開発及び製造を担っている業界なんですけれども、実験計画法ですとか、品質工学ですとか、統計学等々の教育をどこの学校を出ても中々受けてこられないんです。高専も。当然、企業内で全て教えるわけですが、ということを昨年ご要望させていただきました。昨今、みなさんご存じの通りテレビやメディアで出ているAIがだいぶ進んでまいりまして、統計の領域も1歩2歩進んだ領域に入りつつあるんです。キーワードだけ申し上げますが、いわゆるデータサイエンスという言葉で語られているベイズ推定とかカーネルトリック、スパースモデリング、ディープラーニングという領域に入ってきていて、実用化されつつある企業さんも出てきます。うちの会社はまだなんですけれども、聞くところによりますとデンソーさんでは5年程の実績があって、多くの制御因子の相互作用が図示されてすぐわかる活用事例の実績が出てきていると伺っています。製品の機能が進化し非常に設計の難しい時代になってきてますので、完成度を高めるために追求しなければならない時代になってきているかと思います。このへんも視野に入れて、お考えいただけたらな、と思います。もう一つ、若干これは私の持論なんですけれども、昔から日本の教科書というのは最後まで、特に社

会は近代史とか現代史というところがやらずに終わっているというところがあります。第二次世界大戦ということもあったんですけども、欧米ではその辺の時代のことも、両論併記した上で学生に考えさせるように伺っております。これは今、国際化、グローバルゼーションというところで一步踏み出して力を入れている時に、外国の方から質問されて答えられない人材というのは世界的に認められない。もう一つ、宗教ですが、クリスマスやって、神様まいりしてお寺さんと呼んで、というのがお前のアイデンティティとして信じられないと言われているのですが、せめて自分の国の近代、現代史というのだけは、カリキュラムを新設してでも教えていただいた方がいいんじゃないかと思います。中立に両論併記で教えていただいて、学生自身に考えていただく、というアクティブラーニングを実践していただければと思います。

新田校長：ありがとうございます。去年のご指摘もありますから、新しい学問領域的なところもAIから絡んで出てきますし、品質管理は基礎的なところですから、我々もチェックして対応を考えさせていただきます。それから2点目の話は高専が全体を挙げて各校バラバラで特に人文科系、社会科系は先生の趣味で教えてるような状況があったので、1～3年生程度は人文社会含めて、全国バージョン、モデルコアカリキュラムということで、基本的に6割は共通で教えて、残りの4割は各学校の独創性があり、鈴鹿高専らしさを出しながらということで検討しています。ですから、歴史も極端に言ったら昔は中世史しか教えていなかった、中国史しか教えてなかった先生もいたんですけどもこれからはそういうことにならないようにバランスをとってということで考えています。また、ご指摘の点も含め考えたいと思います。

今日、非常に貴重なご意見をいただきました。十分に整理はできていないんですけども、各先生方から本校のこれからについて、特に最初の点ではキャリア教育をもう少し本格的にやっていくという、これには色んな知見があるかと思しますのでその辺を勉強しながら進めたいと思います。それから、アクティブラーニングとか先程の授業の話も含めて、これからの授業の形態ですね、その辺の改良にも努めたいと思いますし、地域と世界を目指した人材育成ですが、やはり地元というのが一番基礎ですから、そこにポイントを置いた人材育成を、どうしたら地元定着率が高くなるかを含めて考えていきたいと思っております。いずれにしても高専の良さをいろいろ宣伝しながら、また中学校からもたくさん来ていただきたいと思っておりますので、ご支援よろしく願いいたします。そういうことで、いただいた意見を基にさらに我々のほうで検討して来年度に活かしたいと思っております。引き続きよろしく願いいたします。どうもありがとうございました。

五十棲総務課長：ここで、最後になりますけれども本校学内委員の井瀬副校長が3月末で異動となりまして、4月から弓削商船高等専門学校の校長として赴任することとなりました。

井瀬副校長：もう一年、何もないはずの一年だったんですけれども、弓削商船高専に行くことになりまして、海の男になることになりました。今後ともよろしく願いたします。

6. 閉会

鈴鹿工業高等専門学校における中期目標

(前文)

鈴鹿工業高等専門学校は、我が国の工業発展を支える技術者の育成をめざし、昭和 37 年高専制度第 1 期校として工業先進地である東海地区鈴鹿市に創設され、以来、知徳体三育の全人教育を範とする建学の精神にのっとり、優秀な実践的技術者を育成し、広く地域と社会に貢献してきた。

21 世紀を迎えた今、地球環境保全の観点に立った科学技術の高度化や国際化の進展により、技術者教育を担う高等専門学校には新たな展開が求められている。以上を踏まえ、本校の教育理念を定め、養成すべき人材像を掲げる。

教育理念

- (1) 広い視野から価値判断ができ、技術者精神を備えた豊かな人間性を涵養する。
- (2) 科学技術に関する高い専門知識と技術に基づく深い洞察力と実践力を育成する。
- (3) 未知の問題に果敢に挑み、新たな価値を創造する力を育てる。
- (4) 心身を鍛え、己を確立し、自ら未来を切り拓く力を育てる。

養成すべき人材像

- (1) 生涯にわたり継続的に学修し、広い視野と豊かな人間性をもった人材を養成する。
- (2) 高い専門知識と技術を有し、深い洞察力と実践力を備えた人材を養成する。
- (3) 課題探求能力と問題解決能力を身につけた創造性豊かな人材を養成する。
- (4) コミュニケーション能力に優れ、国際性を備えた人材を養成する。

I 中期目標期間

中期目標期間は、平成 26 年 4 月 1 日から平成 31 年 3 月 31 日までの 5 年間とする。

II 国民に対して提供するサービスその他の業務及び質の向上に関する事項

1 教育に関する目標

学科においては、5 年一貫の教養教育及び実践的工学教育により、創造性豊かな実践的技術者として将来活躍するための基礎的な知識と技術及び生涯にわたり学習する力を育てる。

また、専攻科においては、より高度で幅広い専門知識や創造力、判断力を身に付け、科学技術の分野で国際的に活躍できる実践的技術者を育てる。

(1) 入学者の確保

本校の特色や魅力について、中学生や地域に広く広報活動を組織的に行うとともに入試方法の点検と改善を行うことによって、アドミッション・ポリシーにそった人材を確保する。

(2) 教育課程の編成等

中央教育審議会答申の趣旨や入学志願者の動向を踏まえて本校の将来像を検討・策定し、これに基づき、産業構造の変化、技術の高度化、国際化、社会のニーズ等に対応した教育課程を編成し実施するとともに、その自己点検や改善を継続的に進める体制作りを推進する。

このほか、豊かな人間性や社会性を育むため、全国的な競技会やコンテストへの参加を通して課外活動の充実を図るとともに、社会奉仕体験活動等の機会の充実に努める。

(3) 優れた教員の確保

公募制を実施することにより、優れた学識と豊かな経験を有する教育研究能力の高い人材の確保に努める。

また、FD活動を組織的に実施し、優秀な教員の表彰を行うとともに、教員研修や研究会等(国外を含む。)に参加する機会を充実する等、教員の教育力の向上に努める。

(4) 教育の質の向上及び改善のためのシステム

高専教育の特色である「くさび型教育」を踏まえた教育方法の改善を進めるとともに、日本技術者教育認定機構(JABEE)の基準を満たす教育プログラム(複合型生産システム工学)を実施し、社会が求める教育内容・水準の維持向上を図るため、継続的な点検・評価・改善を図る。

(5) 学生支援・生活支援等

豊かな人間性、健全な心身及び確かな自己実現を図るため、学生の学習活動や課外活動等への参加を促進し、未来を自ら切り拓く力を引き出せるよう修学上及び生活上の支援を行うとともに、学生の進路指導支援体制の充実を図る。

(6) 教育環境の整備・活用

施設設備は本校の教育研究活動の基盤であるとの観点から、長期的な教育環境整備構想を策定し、整備に当たっては、環境保全等の社会的要請に十分配慮(障害者への配慮も含む。)するとともに、地球環境や都市環境の保全のため、省エネルギー対策を推進する。

また、教職員・学生の健康・安全を確保するため、安全衛生管理体制の整備・充実を図る。科学技術分野への男女共同参画を推進するため、修学・就業上の環境整備に関する方策を多様に講じる。

2 研究や社会連携に関する目標

教育内容を学術の発展に即応させるため、継続して研究を行う。そのために必要な学術的研究のみならず先進的な研究、学科間を超えた複合・融合領域研究、産学官連携による共同研究・受託研究も推進する。これらの研究成果を発表や知的財産化等で広く社会に提供し、人材育成及び地域・産業界に貢献する。

地域交流・地域連携・産学官連携等を通じて本校の教育研究の成果を社会に還元し、その連携協力を努める。また、地域の生涯学習機関としての役割を果たす。

3 国際交流に関する目標

外国の高等教育機関との協定に基づく学生の国際交流を継続発展させ、国際的な視野と知見を備えた技術者の育成を図るとともに、留学生の受入れを積極的に行う。

4 管理運営に関する目標

校長のリーダーシップの下に、運営会議を中心とした施策立案、審議執行及び評価監査のサイクルを確立するとともに、迅速かつ効率的な運営を図るため、運営会議及び各種委員会の位置付け、機能及び審議・協議事項の明確化を図る。

また、本校における教育研究等の活動全般について自己点検・評価を行うとともに、広く外部からの意見を取り入れ、開かれた学校運営を行う。

さらには、限られた各種資源を戦略的に配分するため、本校の運営方針に基づき、重点的に資源配分する仕組みを整備するとともに、事務組織の機能、編成等を見直し、事務処理の効率化・簡素化並びに事務職員及び技術職員の資質の向上に努める。

業務運営のために必要な情報セキュリティ対策を適切に推進するため、政府の方針を踏まえ、情報システム環境を整備する。

Ⅲ 業務運営の効率化に関する事項

運営費交付金の減額による支障が発生しないように業務の効率化を図る。

Ⅳ 財務内容の改善に関する事項

1 自己収入の増加

教員の研究活動や産学連携活動等を活性化させることにより、科学研究費助成事業、科学技術振興助成金等の外部研究資金の獲得に積極的に取り組み、その他の自己収入の増加を図る。

2 固定的経費の節減

管理業務の合理化に努めるとともに、本校の財務運営を適切に行い、教職員の意識改革を図って、固定的経費の節減に努める。

鈴鹿工業高等専門学校における中期計画

I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するために取るべき措置

1 教育に関する事項

(1) 入学者の確保

- ア 本校の教育理念を的確に反映したアドミッション・ポリシーを募集要項に明記するとともに、ポリシーに添った学生受入が行われているかどうかを検証し、入試に反映させる。
- イ 入試に関する情報収集、入試状況に関する分析と対策、各種広報資料の作成、広報・渉外活動等を総合的に担うための学内組織（入試対策室）を活用し、社会へ向けた体系的で効果的な入試広報活動を行う。
- ウ 本校主催の学校説明会・見学会・受験相談等の一層の充実を図り、また中学校主催の説明会等への参加等各種の入試広報活動を積極的に行うとともに、特に女子の志願者増に向けた取り組みを推進する。
- エ ものづくりへの関心と適性を有する者など国立高等専門学校の教育にふさわしい優れた資質をもった入学者を安定的に確保するため、継続的な入学者選抜方法の点検と改善を図る。
- オ 入学後の学力水準の向上に資するため、入試成績と在学中の成績との相関関係の継続的な追跡調査等を行い、その検証結果を入試システムの改善のためにフィードバックする。
- カ 本校の教育・研究資源を活用した中学生向け体験プログラム等を実施し志願者増加対策を推進する。
- キ 専攻科の魅力・特色・優位性の広報を図り、入学者確保に努める。
- ク 女子学生等の受入を推進するとともに、入学志願者の質を維持する。

(2) 教育課程の編成等

- ア 国立高等専門学校としてふさわしい教育成果の達成すべき内容と水準を以下のように設定して、教育課程を編成し実施する。

① 学科教育

[教養教育]

豊かな人間性と社会性を涵養し、広い視野からの問題把握と価値判断ができる力を培う。また、自然科学及び情報処理の知識を習得させるとともに、英語によるコミュニケーション能力を育成する。

[専門教育]

「複合型生産システム工学」教育プログラム（2003年度 JABEE 認定）で期待される高い専門知識と豊富な実験技術を養う。

・機械工学科

機械工学に関する理論と知識（材料と構造、運動と振動、エネルギーと流れ、情報と計測・制御、設計と生産、機械とシステム等）、実験技術を習得させるとともに、応用・展開力、創造性を養う。

・電気電子工学科

電気電子工学に関する理論と知識（電気磁気学、電気・電子回路、エネルギー・電気機器、物性・デバイス、計測制御、情報・通信）並びに全学年にわたって系統的に配置した実験・実習科目により実践的な技術を習得させ、創造性を養う。

- ・電子情報工学科
電子情報工学に関する理論と知識（電気磁気学、電子回路、電子工学、電子制御、ソフトウェア工学、計算機工学、情報通信ネットワーク等）及び実験技術並びにそれらの融合化技術に関する知識を習得させるとともに、創造性を養う。
- ・生物応用化学科
化学に関する理論と知識（無機化学系科目、有機化学系科目、分析化学系科目、生物化学系科目、物理化学系科目等）及び応用化学あるいは生物工学に関するコース別専門知識（工業化学系科目、化学工学系科目、設計・システム系科目、環境工学系科目、細胞工学系科目、遺伝子工学系科目、生体材料工学系科目等）並びに豊富な実験技術を習得させるとともに、創造性を養う。
- ・材料工学科
材料工学に関する理論と知識（材料の物理と化学、材料の構造・設計・物性・機能、製造プロセス等）及び豊富な実験技術を習得させるとともに、それらを応用して材料に関連する諸問題を解決できる創造性を養う。

② 専攻科教育

JABEE の認定基準に準拠した複合型生産システム工学に関連する分野で技術革新を担うことができる高度で幅広い専門知識を習得させるとともに、研究開発能力、課題探求・問題解決能力、技術者倫理を含む総合的判断力、英語によるコミュニケーション能力の育成を図り、技術開発の場で新たな価値を創造する力を育てる。

- ・電子機械工学専攻
機械工学、電気電子工学、電子情報工学等の学科出身者を対象として、機械・生産システム、メカトロニクス、計測制御技術、エレクトロニクス、情報技術などの分野で技術革新を担うことができる高度な専門知識を習得させるとともに、研究開発能力を養う。
- ・応用物質工学専攻
生物応用化学、材料工学等の学科出身者を対象として、ファインケミストリー、バイオテクノロジー、材料プロセッシング、環境保全・リサイクル技術、及び機能性新素材などの分野で技術革新を担うことができる高度な専門知識を習得させるとともに、研究開発能力を養う。

イ 今後の産業構造の変化や技術の進展、社会の要望等を踏まえ、学科・専攻科構成の見直しと改組・再編を検討する。

ウ 本校独自の評価項目に沿った自己点検評価・改善及び外部評価、認証評価、JABEE 審査等の第三者評価に積極的に取り組み、教育研究の質の向上と組織の活性化・効率化を図る。

エ 中学校・高校・大学の教育改革の動向を把握し、教育課程の見直し等に反映させる。

オ 学生の学力、実技技能、創造性、学習・教育目標達成度等の適切な評価方法を検討し導入する。

カ 卒業生・修了生を含めた学生による適切な授業評価・学校評価の方法を検討し、実施する。

キ 創造教育を推進するため、ソーラーカーレース、ロボットコンテスト、プログラミングコンテスト、小水力発電コンテスト、デザインコンペティション等の指導と支援に関し、教職員で構成するプロジェクト活動の充実・強化を図る。

ク 学生の豊かな人間性と社会性を涵養するため、高専体育大会等の各種体育大会への参加を促進するとともに、社会奉仕体験活動や自然体験活動を含む課外活動等の充実を図る。

ケ 学生の自主的学習を推進するための相談・助言を行う体制を整備し運用する。

- コ 人間の素養を涵養するための教育を検討し推進する。
- サ 教員間連携の推進により、教科間の授業内容等の整合を図る。

(3) 優れた教員の確保

- ア 教員組織の活性化と流動化を図るため、本校以外の教育機関、研究機関、企業等での勤務経験がある多様な背景をもつ教員を計画的に採用し、その比率の向上に努める。また、正規の教員以外の者を客員教授又は客員准教授として、本校の教育又は研究に従事できるようにする。
- イ 教員の個々の力量と学校全体の教育力を高めるため、内地及び外地研究員制度の活用、教員研修、国際研究集会への参加、学術交流、他高専との人事交流等を推進する。
- ウ 専門科目及び理系一般科目については博士の学位や技術士等の職業上の高度の資格をもつ者を、理系以外の一般科目については修士以上の学位を持つ者、高度な実務能力を持つ者等優れた教育力を有する者を、それぞれ採用し、その比率の向上に努める。
- エ 女性教員の比率向上を図るため、必要な支援策について引き続き検討を行い、働きやすい職場環境の整備に努める。
- オ 教員の教育能力の向上を目的としてFD活動を積極的、具体的に促進する。
- カ 教員の教育研究活動を客観的に評価するシステムを確立し、独立行政法人国立高等専門学校機構の教員表彰等に活用する。
- キ 優れた教育研究成果をあげた教員の顕彰制度を継続実施する。

(4) 教育の質の向上及び改善のためのシステム

- ア インターネットなどを活用したICT活用教育の取組を充実させる。
- イ JABEEの認定プログラムを改善を加えつつ実施し、不断に教育の質の向上を図る。
- ウ 多様な方法で学校の枠を超えた学生の交流活動を推進する。
- エ 教育目標を達成するため、とくに英語教育、情報教育、創造教育の評価を行い改善を進める。
- オ 本校独自の評価項目に沿った自己点検評価・改善及び外部評価、認証評価、JABEE審査等の第三者評価に継続的に取り組み、持続的な教育改善を図る。
- カ 教員の教育、研究、社会貢献等の活動に関するデータベースを充実し教育の質の改善に活用する。
- キ 企業の現役及び退職技術者や外部の専門家等、意欲ある企業人材を活用した教育体制を構築する。
- ク インターンシップの内容と方法を見直し、その一層の充実を図る。
- ケ 教育研究フォーラムやシンポジウム等に積極的に参加し、研究成果を発表するとともに他校との教員交流を促進する。
- コ 技術者教育等の地域における共通の問題を解決するため、近隣の大学等との連携・協働を推進する。

(5) 学生支援・生活支援等

- ア 学生の人間形成支援のため、クラブ活動への学外指導者の登用や複数教員指導体制の推進など課外活動への支援体制を充実する。
- イ 学生支援室相談員や学級担任の資質の向上を図るための研修会、講演会等を実施する。
- ウ 学生の適正や希望に応じた進路選択を支援するため、企業情報、就職・進学情報等の提供体制や専門家による相談体制を含めたキャリア形成支援を充実させる。
- エ 学習情報システムを整備し、学習支援体制を強化する。

- オ 教育寮としての学生寮を効果的に運営し、継続的な寮生への学習支援と生活支援を図るとともに、自主・自律と相互扶助の精神を養う。
- カ 課外活動等を通し、学生の創造設計力向上の支援を進める。
- キ 学生・教職員間のコミュニケーションの円滑化を図る方策を検討し実施する。
- ク 各種奨学金制度の積極的な活用を促進し、奨学金を希望する学生の貸与率の向上を図る。

(6) 教育環境の整備・活用

- ア 教育の質の向上、健康的な学生生活の保障、地震等災害防止、ユニバースルデザイン導入等のために必要な施設・設備の整備を図る。
- イ 施設設備のきめ細やかなメンテナンス、校内の環境保全等を目的とした施設整備等を行う。
- ウ 「施設の利用状況及び施設実態の自己点検・評価」、「施設の有効利用計画」を実施策定し、施設の有効利用を促進する。
- エ 労働安全衛生法等を踏まえた安全管理・事故防止に関する具体的方策を立て、実施する。
- オ 職員宿舎の有効利用方法を検討する。
- カ PCB 廃棄物については、計画的に処理を実施する。
- キ 男女共同参画を推進するため、情報の収集・提供について充実させる。

2 研究や社会連携に関する事項

- (1) 教育内容を学術の発展に応じたものとするため、教員各自の専門的研究を推進する。
- (2) 競争的研究資金の導入等を通して学内研究活動の一層の活性化を図る。また、研究費助成事業の獲得に向けたガイダンスを実施する。
- (3) 校長裁量経費の活用により学科横断的な共同研究を推進する。(4) 産学官連携協力を積極的に推進するため、自治体、商工会議所、企業等と連携する共同研究プロジェクトや地域産業・社会に貢献できる研究テーマを創出し、実施する。
- (5) 特許取得を奨励・支援するため、学内における知的財産権に関する認識の向上を図る。
- (6) 研究紀要の質の向上を図るため、査読制度を継続する。
- (7) 重点研究課題の一つとして地球環境問題を取り上げる。
- (8) SUZUKA 産学官交流会が開催する交流フォーラム、産学技術サロン等への主体的取り組み等地域における産学官連携協力を積極的に推進する。
- (9) 本校の地域貢献活動を企業や社会に明解に伝達できるよう、多様な媒体を用いた広報活動を展開する。
- (10) 地域の生涯学習機関としての役割を果たすため、公開講座、授業開放、オープンキャンパス事業、出前授業、図書館蔵書等を充実する。
- (11) 小中学校に対する理科教育支援活動を積極的に推進する。

3 国際交流等に関する事項

- (1) 学生や教職員の国際交流を促進するため、米国・オハイオ州立大学への学生交流派遣を継続実施するとともに、カナダ・ジョージアン技術大学と中国・常州信息技術学院等との国際交流を強化する。また、ヨーロッパにも交流の拠点を設ける。
- (2) 留学生と日本人学生及び地域社会、並びに他高専留学生との交流活動を積極的に支援する。
- (3) 機構本部主催の海外インターンシップにも積極的に学生を派遣する。
- (4) 国際交流センターの取組を積極的に活用する。

4 管理運営に関する目標

- (1) 校長のリーダーシップのもと迅速かつ効率的な学校運営を図るとともに、学校の管理運営に関する不断の点検評価と継続的な改善を行う。
- (2) 各種委員会の位置付け、機能及び審議事項を明確にし、効果的かつ効率的な学校運営を行うとともに、本校のPDCAサイクルシステムに基づいて委員会活動の成果・効果を評価しつつ改善を図る。
- (3) 外部の意見を学校運営に反映させる。
- (4) 内部監査体制を構築し、また他高専等と連携して、監査の強化を図る。
- (5) 教職員の職務状況を客観的に評価し、その評価を全教職員の資質の向上と業務運営の効率化に反映させる。また、学校経営の観点から業務内容と業務量の見直しを行い、適正な人員配置（アウトソーシングを含む。）と業務の合理化・効率化を図る。
- (6) 職員の能力開発と専門性の向上のため、民間等で行う研修を含めた研修会に積極的に参加させる。
- (7) 職員の採用・人事交流に当たっては、専門的知識や技能を有する人材を確保する。
- (8) 再雇用等定年後の雇用について合理的効果的な方法を検討し実施する。
- (9) 平成23年度機構本部策定の「公的研究費等に関する不正使用の再発防止策」を確実に実施する。
- (10) 学校の課題やリスクに対し、研修や倫理教育等を通じて全教職員の意識向上に取り組む。
- (11) 業務運営のために必要な情報セキュリティ対策を適切に推進するため、規則や手順等を整備する。

5 その他

校長のリーダーシップのもとで近隣高専との連携を考慮しながら、本校の将来像を検討し策定する。

II 業務運営の効率化に関する目標を達成するために取るべき措置

- (1) 中長期的な観点に立った適切な人員管理を策定するとともに、本校全体の人事方針に基づく運用・調整を行う。
- (2) 管理業務を全般的に見直し、業務の合理化と効率的運用を図る等、運営費交付金の減額による支障の発生しないよう継続的な努力をする。

III 予算（人件費の見積もりを含む。）、収支計画及び資金計画

1 収益の確保、予算の効率的な執行、適切な財務内容の実現

- (1) 教員の研究活動や産学連携活動等を活性化させることにより、科学研究費助成事業、科学技術振興助成金等外部研究資金の獲得に積極的に取り組む共に、その他の自己収入についても増加を図る。
- (2) 企業との共同研究等を推進し、助成金申請件数の増大を図る。
- (3) 運営費交付金である人件費、物件費等の効率的な執行を行うとともに、適切な財務管理を行う。

2 予算

- (1) 校長裁量経費を活用して、予算の戦略的重点配分を行う。
- (2) 教職員の意識改革を図り、事務費、光熱水料費等固定的経費の節減に努める。
- (3) 経費の節減等で発生した余剰金については、次年度の教育研究活動、学生支援並びに公開講座・産学官連携の推進等の充実に充てる。

平成26年度 年度計画

鈴鹿工業高等専門学校

1 教育に関する事項

1-1 入学者の確保

- ① 引き続きホームページ、地元マスコミ等を通じて広く本校のPR活動を行う。
- ② 入試説明会、オープンキャンパス、学習塾対象説明会の実施方法、中学校主催の進路指導説明会への参加を実施するとともに、より効果的な方法について検討する。
- ③ 女子中学生向けの本校パンフレットを作成する。
- ④ 本校主催の中学生向けコンテスト（柔道・剣道・英語）を継続実施する。
- ⑤ 入試方法（推薦入試と学力入試）の違いと入学後の成績の相関性を調べ、入試方法の改善が必要かどうかを検討する。
- ⑥ 鳥羽商船と連携し、引き続き双方の学校を入学試験会場としての最寄地受験を実施する。
- ⑦ 今年採択された高専機構の「男女共同参画推進モデル校：女子学生の比率向上及びキャリア教育の充実を図る取組」を活用する。

1-2 教育課程の編成等

- ① 高度化検討ワーキングを中心に、教育内容、学科・専攻科の再編を含む高度化計画を確定する。
- ② 国際的に活躍できる人材を育成するため、専攻科1年次の少人数英語教育とカナダでの語学研修を継続的に実施する。
- ③ エンジニアリングデザイン科目としての工学実験の内容をさらに充実させる。（専攻科）
- ④ 海外インターンシップを積極的に支援する。（専攻科）
- ⑤ 英語コミュニケーション能力を高めるため、TOEIC受験の支援、少人数英語教育（ネイティブスピーカーTAを用いた英語コミュニケーション授業）等を継続する。
- ⑥ 4年生を対象にした英語力優秀学生の表彰制度を設ける。なお、英語力はTOEICのスコアにより評価する。
- ⑦ 引き続き、学習到達度試験を実施し、数学・物理の教授法向上に反映させる。
- ⑧ 学生による授業評価アンケートを実施し、その結果を受けて改善案を各教員が公開し、その案に基づいて行った授業の評価を次のアンケートで検証し、その検証結果を公開する。
- ⑨ ロボコン、プロコン、デザコン、エコカー、小水力発電および高専体育大会に参加する。
- ⑩ 「豊かな人間性と社会性」の涵養を図るべく、新入生合宿研修等の自然体験活動を推進する。
- ⑪ 「キャンパス・クリーンデー」等により、高専周辺の道路及び公園等の美化に努める。
- ⑫ 学生会による駅前空き店舗を活用した「鈴鹿テラス」の取り組みを支援する。なお、鈴鹿テラスにおいては、主に小中学生を対象に理科教室や高専紹介、勉強相談等を実施する。
- ⑬ ボランティア委員会を中心として、鈴鹿市周辺のボランティア活動への参加、及び自主的活動の立案・実施を通して、全学生の地域貢献意識の向上を図る。

1-3 優れた教員の確保

- ① 本校以外の教育機関、研究機関、企業等で勤務経験がある等、多様な背景を持つ人材の採用に努める。
- ② 公募制を堅持し、優れた教員の確保に努める。
- ③ 引き続き、高専・両技科大間教員の交流を図る。
- ④ 引き続き、大阪大学大学院工学研究科の教員との交流を図る。
- ⑤ 専門科目については博士の学位や技術士等の職業上の高度な資格をもつ者、理系以外の一般科目については修士以上の学位をもつ者あるいは高度な実務能力をもつ者等、優れた教育力を有する者の採用に努める。
- ⑥ 引き続き女性教員の積極的な採用に努め、平成30年4月までに女性教員を15名以上にする。
- ⑦ 女性教職員のための就業環境整備について、引き続き問題点の洗い出しと改善を図る。
- ⑧ 鈴鹿市教育委員会、高等学校等関係機関と連携し、鈴鹿市青少年健全育成連絡協議会、中勢地区高等学校生徒指導連絡協議会、中学、高等学校合同指導会等に参加、活動することを通じて、学生生活の質及び教員の指導力の向上を図る。
- ⑨ 全教員対象のFD講演会を実施する。
- ⑩ 本校の教員が国内外の教育研究機関に長期にわたって勤務（研修）できる制度を活用し、派遣を計画する。

1-4 教育の質の向上及び改善のためのシステム

- ① モデルコアカリキュラム対応のシラバスを実行する。
- ② CBT（Computer Based Test）の試行を行う。
- ③ 引き続き、一般科目と専門科目の教員間・科目間連携を行う。
- ④ 引き続き認定が得られるよう、今年度JABEEを受審する。
- ⑤ エンジニアリングデザイン教育、特に4年生の創造工学、専攻科生の工学実験に企業技術者を活用する。
- ⑥ 鈴鹿高専テクノプラザに加盟の企業技術者を講師としたエンジニアリングデザイン教育の充実を図る。
- ⑦ 本校のPDCAサイクルが円滑に機能するよう、本校独自の評価項目に沿った自己点検評価シート及び多角的評価に向けたファイル管理のシステムを作成し、継続的に自己点検評価システムの充実を図る。
- ⑧ 引き続き、各委員会等の活動に関する「年度計画の発表」、「年度末活動報告会」を実施する。
- ⑨ 卒業までに8割以上の学生がインターンシップに参加できるよう、特に4年生でインターンシップに行けなかった5年生のインターンシップを検討する。
- ⑩ インターンシップ重視に向けて、企業との対応を引き続き教務主事補が行う。
- ⑪ 熟練した企業技術者を非常勤講師として採用し、エンジニアリングデザイン教育、特に4年生の創造工学、専攻科生の工学実験の充実を図る。
- ⑫ 鈴鹿高専テクノプラザに加盟の企業技術者を講師としたエンジニアリングデザイン教育の充実を図る。

- ⑬ 三機関が連携・協働した教育改革を推進する。
- ⑭ moodle 等を活用した教育を推進する。
- ⑮ eHELP の活用を検討する。
- ⑯ 学科のいくつかの授業を ICT を用いたアクティブラーニングの授業とし、その評価システムの試行を行う。
- ⑰ 無線 LAN 等を用いた学生用インターネット接続サービスの試験運用を開始する。

1-5 学生支援・生活支援等

- ① メンタルヘルスに関する講習会等に教員を派遣する等、支援のための知識の獲得に努める。
- ② 「こころと体の健康調査」結果を活用するとともに、精神科医や臨床心理士、カウンセラーと連携し、メンタルヘルスに関する取り組みを推進する。
- ③ 日常における学生とのコミュニケーションスキルアップを図るとともに、「学生支援室」と協力して、本校における「特別支援教育」を必要とする学生の実態の把握に努める。
- ④ 女子学生の教育・生活・進路支援を行う。
- ⑤ 今年度より各居室にエアコンを設置する。
- ⑥ 図書・学術雑誌等教育研究上必要な資料・電子ジャーナルを系統的に整備し、活用を図る。
- ⑦ 学生の希望図書の購入、ブックハンティングを継続的に実施する。
- ⑧ 図書館内及び図書館ホームページ上に希望図書コーナーを継続して設置する。
- ⑨ 英語多読図書コーナーの図書充実を図る。
- ⑩ イノベーション交流プラザに合宿できる部屋を設ける。
- ⑪ 就学困難な学生に対して各種奨学金等の周知をし、授業料免除制度及び支援支援金等について学生だけでなく保護者に対しても周知を図る。
- ⑫ 地元企業合同説明会を本校で開催する等、地元企業への就職希望者の支援を行う。
- ⑬ インターンシップを就職と密接に関連する取組と考え、その業務を教務主事補が行うこととして、その業務の充実を図る。
- ⑭ 引き続き、就職・進学した OB・OG を招いたキャリアガイダンスを行う。
- ⑮ 「高専女子フォーラム」を活用して、キャリア形成支援について検討する。
- ⑯ 5年生の就職・進学体験を3年生と4年生に聞かせていたが、それを1年生、2年生にも広げる。
- ⑰ 学内ホームページから企業の求人票が見られるようにする。
- ⑱ 女子学生の就職先拡大について検討する。

1-6 教育環境の整備・活用

- ① 昨年度実施した防災調査への対応をリスク管理室、安全衛生委員会、安全教育分科会で行う。
- ② 教員の研究室、実験室の環境巡視を安全衛生委員会が行う。
- ③ イノベーション交流プラザ（耐震改修前は第3青峰寮）に学生の自習室を設ける。
- ④ 試験期間中の日曜日の図書館の開館を引き続き行う。
- ⑤ 設備整備マスタープラン検討部会を立ち上げ、今後10年の研究設備を中心とした整備計画を立てる。

- ⑥ 管理棟の耐震改修を行う。
- ⑦ 組換え DNA 実験安全管理規則の運用を進める。
- ⑧ AED 講習会を実施する。

2 研究に関する事項

- ① 引き続き、科学研究費補助金等外部資金への応募のための学内ガイダンスを実施する。
- ② 科学研究費補助金への申請率 80%、採択率 40%の達成に向けて取り組みを強化する。
- ③ 科研費塾、科研説明会、申請書の事前レビュー、応募者に対するインセンティブ付与等の取り組みにより、申請率や採択率の向上を目指す。
- ④ 鈴鹿高専テクノプラザや産学官連携コーディネータ等を活用し、産業界との共同研究・受託研究の受入を推進する。
- ⑤ SUZUKA 産学官交流会の場を活用し、本校の研究紹介等を行い、企業との交流を深め、共同研究への展開を図る。
- ⑥ 鈴鹿高専テクノプラザによる技術講習会を開催する。
- ⑦ SUZUKA 産学官交流会において、研究サロンやフォーラムを実施する。
- ⑧ 共同研究推進センターを中心に、地元企業との連携教育・研究の活発化を図る。
- ⑨ イノベーション交流プラザ（耐震改修前は第3青峰寮）内に、地域児童生徒の理科教育、地域企業と教員との技術情報交換の場を設立する。
- ⑩ イノベーション・ジャパン 2014 へ出展する。
- ⑪ 鈴鹿市との学官連携協議会を継続開催する。
- ⑫ 特許取得を奨励・支援するため学内における知的所有権に関する認識の向上を図る。
- ⑬ （独）工業所有権情報・研修館（INPIT）募集の「知的財産に関する創造力・実践力・活用力開発事業」展開型の採択を受け、知財人材の育成のための教育を一層推進する。
- ⑭ 創造工学等で発想されたアイデアの知財化、パテントコンテストへの応募を推進する。
- ⑮ 鈴鹿市主催のリーダー研修の講師や三重県産業支援センター主催の産業技術人材育成事業の講師を務める。
- ⑯ 教育委員会や小・中学校と連携した事業、オープンキャンパス、公開授業、出前授業、ものづくり体験教室等を通して理科教育の支援を行う。
- ⑰ 科学技術コミュニケーション推進事業「ネットワーク形成地域型」（企画名称：地域産業が育てる未来の科学者「みえサイエンスネットワーク」）（JST）を推進する。
- ⑱ 鈴鹿商工会議所主催の「鈴鹿少年少女発明クラブ」（会長：鈴鹿高専校長）を通じ、小中学校と連携し小中学生の発明力の向上を支援する。

3 国際交流等に関する事項

- ① 3校（アメリカ・オハイオ州立大学、カナダ・ジョージアンカレッジ、中国・常州信息職業技術学院）との交流協定の下、その交流を推進する。
- ② ドイツの高等教育機関との新規交流を目指す。
- ③ テマセク・ポリテクニック技術英語研修への参加を支援する

- ④ 機構の海外インターンシップへの参加を推進する。
- ⑤ 引き続き、アメリカ・オハイオ州立大学へ教員・学生を派遣する。
- ⑥ 引き続き、専攻科学生を語学研修のため、カナダ・ジョージアンカレッジに派遣する。
- ⑦ 引き続き、中国・常州信息職業技術学院から、教員・学生を受け入れる。来年は派遣する。
- ⑧ テマセク・ポリテクニク技術英語研修への参加を支援する。
- ⑨ 全国国立高専による私費外国人留学生対象の3年次編入学試験の実施に協力する。
- ⑩ 東海地区5高専に在学する外国人留学生に対する研修会に留学生を参加させる。
- ⑪ 留学生関連行事として、実地研修旅行、校長との懇談会、進路支援相談会、留学生交流会、小学校との交流を引き続き実施する。

4 管理運営に関する事項

- ① リスク管理室を中心に学内の安全管理に取り組む。危機管理マニュアルを見直し、周知を徹底する。
- ② 学内ネットワークの円滑かつ安全な利用を目的とした学生・教職員向けの講習会（セキュリティ講習会等）を継続する。
- ③ 学生・教職員の安否確認システム（「すぐメール」）の登録及び更新を徹底する。
- ④ 内部監査体制を改善し、他高専と連携するなど監査の強化を図る。
- ⑤ 教職員を対象としたコンプライアンス意識向上に関する研修を実施する。
- ⑥ 教職員を対象とした公的研究費等に関する不正使用防止に関する研修会を検討する。
- ⑦ 配分を受けた競争的資金について内部監査を強化する。
- ⑧ セクシャルハラスメント及びメンタルヘルスに関する講習会を開催する。
- ⑨ 事務職員及び技術職員の能力向上を図るため、地方自治体、民間等外部団体主催の研修に積極的に参加する。
- ⑩ 事務職員等の採用・人事交流に当たっては、近隣の国立大学法人等との計画的な交流を実施することで多様性のある人材の確保に努める。
- ⑪ 平成26年4月28日制定「高専間職員交流制度実施要項」に基づき他高専との人事交流計画を策定する。
- ⑫ 再雇用制度を有効活用するため、その運用方法を絶えず見直し、これに基づいて運用する。
- ⑬ 機構の提供するIT資産管理システムにより、ソフトウェア管理を適正かつ効率的に行う。
- ⑭ 高専機構本部等が実施する情報系の研修会に積極的に参加する。

5 業務運営の効率化に関する目標を達成するために取るべき措置

- ① 従来予算配分方針を見直し、予算の効率的な運用を策定し、運営費交付金の縮減に対応する。
- ② 管理運営に関する各種委員会の再編による効率的運用や事務組織との緊密な連携により、一般管理費の縮減の節約に努める。
- ③ 新規事業の開拓や既存事業の新たな発展に向け教職員の積極的な参画を図るとともに、外部資金の獲得を推進することで一般管理費からの配分を押さえる。
- ④ 現状では一般入札で対応することとしているが、引き続き随意契約を行わないことを徹底する。

6 予算（人件費の見積もりを含む。）、収支計画及び資金計画

- ① イノベーション交流プラザを活用するなど教員の研究活動や産学連携活動等を活性化させることにより、寄附金、科学研究費補助金等の外部資金及びその他の自己収入の増加を図る。
- ② 大型設備や機器を活用し企業との共同研究を推進するとともに、財団や企業からの助成金申請件数の増大を図る。
- ③ 学生定員を充足し、入学料・授業料等の学納金収入を確保する。
- ④ 人件費、物件費等の効率的な執行を行うとともに、適切な財務管理を行う。
- ⑤ 平成25年度決算報告書（損益計算書）を作成し、公表する。
- ⑥ 平成26年度当初予算配分の基本方針及び平成26年度当初予算配分を策定し教職員に明示することで、節約について教職員の理解を進める。
- ⑦ 研究成果の知的財産化を推進するため、プロジェクト研究・個人研究等経費、教育研究活動に必要な設備整備費、産学官交流及び国際交流のための経費に重点的に予算を配分する。
- ⑧ 環境対策を計画的に進めるためCO2対策経費に予算を配分する。
- ⑨ 引き続き、事務費、光熱水料費等固定的経費の縮減に努める。
- ⑩ 計画的な執行を進めるために常に進捗に留意し未執行分を早期に掌握することで、教育研究活動の充実、学生の福利厚生等の充実、産学連携の推進等の充実に充てる。

7 その他主務省令で定める業務運営に関する事項

7-1 施設及び設備に関する計画

- ① 宿舍の跡地について、平成26年度から始まる駐車場整備五ヶ年計画の実行に入る。
- ② 管理棟改修を計画通りに進めるとともに、校内全域の快適な教育研究環境の計画的な整備を随時行う。
- ③ 校内及び宿舍敷地における交通・駐車マネジメント計画を策定し、環境整備に努める。

7-2 人事に関する計画

- ① 事務組織の業務効率の向上を図るため、業務内容と業務量の見直しを行い、適正な人員配置を行う。

平成27年度 年度計画

鈴鹿工業高等専門学校

1 教育に関する事項

1-1 入学者の確保

- ① 平成26年度の調査結果をもとに、推薦入試の合否判定の方法について検討する。
- ② 入試説明会、オープンキャンパス、学習塾対象説明会の実施、中学校主催の進路指導説明会への参加を実施するとともに、近隣の全中学校の校長・進路担当者と面談するなど、より効果的な方法について検討する。
- ③ 引き続きホームページ、地元マスコミ等を通じて広く本校のPR活動を行う。
- ④ 志願者減に対する総合的な対策を検討する。
- ⑤ 中学生対象のものづくり体験教室を継続実施する。
- ⑥ 昨年採択（今年は継続）された高専機構の「男女共同参画推進モデル校：女子学生の比率向上及びキャリア教育の充実を図る取組」を活用する。
- ⑦ 女子中学生向けの本校パンフレットを作成する。

1-2 教育課程の編成

- ① 将来計画検討委員会の下に組織した高度化検討部会を中心に、教育内容、学科・専攻科の再編を含む高度化計画を確定する。
- ② 英語コミュニケーション能力を高めるため、TOEIC受験の支援、少人数英語教育（ネイティブスピーカーTAを用いた英語コミュニケーション授業）等を継続する。
- ③ 4年生を対象にした英語力優秀学生の表彰制度を継続する。なお、英語力はTOEICのスコアにより評価する。
- ④ 1年生全員の「工業英検4級」受験を継続する。
- ⑤ 2年生全員の「G-TECH」受験を継続するとともに、今年度より3年生全員の受験も開始する。
- ⑥ 引き続き、学習到達度試験を実施し、数学・物理の教授法向上に反映させる。
- ⑦ 国際的に活躍できる人材を育成するため、専攻科1年次の少人数英語教育とカナダでの語学研修を継続的に実施する。
- ⑧ エンジニアリングデザイン科目としての工学実験の内容をさらに充実させる。
- ⑨ 海外インターンシップを積極的に支援する。
- ⑩ 「豊かな人間性と社会性」の涵養を図るべく、新入生合宿研修等の自然体験活動を推進する。
- ⑪ 「キャンパス・クリーンデー」等により、高専周辺の道路及び公園等の美化に努める。
- ⑫ 学生会による年2回の白子駅無料駐輪場の清掃を継続して実施する。
- ⑬ 鈴鹿市主催の成人式を企画・運営する「成人式実行委員会」に継続して参加する。
- ⑭ 鈴鹿地域の伝統産業活性化を目的とした行事に継続して参加する。

1-3 優れた教員の確保

- ① 鈴鹿市教育委員会、高等学校等関係機関と連携し、鈴鹿市青少年健全育成連絡協議会、中勢地区高等学校生徒指導連絡協議会、中学、高等学校合同指導会等に参加、活動することを通じて、学生生活の質及び教員の指導力の向上を図る。
- ② 本校の教員が国内外の教育研究機関に長期にわたって勤務（研修）できる制度を活用し、派遣を計画する。
- ③ 本校以外の教育機関、研究機関、企業等で勤務経験がある等、多様な背景を持つ人材の採用に努める。
- ④ 公募制を堅持し、優れた教員の確保に努める。
- ⑤ 専門科目については博士の学位や技術士等の職業上の高度な資格をもつ者、理系以外の一般科目については修士以上の学位をもつ者あるいは高度な実務能力をもつ者等、優れた教育力を有する者の採用に努める。
- ⑥ 引き続き女性教員の積極的な採用に努め、平成30年4月までに女性教員を15名以上にする。
- ⑦ 全教員対象のFD講演会を実施する。
- ⑧ 学生による授業評価アンケートを実施し、その結果を受けて改善案を各教員が公開し、その案に基づいて行った授業の評価を次のアンケートで検証し、その検証結果を公開する。
- ⑨ 引き続き、高専・両技科大間教員の交流を図る。
- ⑩ 引き続き、大阪大学大学院工学研究科の教員との交流を図る。

1-4 教育の質の向上・改善

- ① モデルコアカリキュラム対応のシラバスを実行する。
- ② CBT（Computer Based Test）の試行を行う。
- ③ すべての科目についてルーブリックを作成する。
- ④ いくつかの授業をアクティブラーニングの授業とする。
- ⑤ 作成したルーブリックの評価項目に基づいた授業を行う。
- ⑥ ICTを活用した教育を推進する。
- ⑦ エンジニアリングデザイン教育、特に4年生の創造工学、専攻科生の工学実験に企業技術者を活用する。
- ⑧ 鈴鹿高専テクノプラザに加盟の企業技術者を講師としたエンジニアリングデザイン教育の充実を図る。
- ⑨ 本校のPDCAサイクルが円滑に機能するよう、本校独自の評価項目に沿った自己点検評価シート及び多角的評価に向けたファイル管理のシステムを簡素化し、継続的に自己点検評価システムの充実を図る。
- ⑩ 引き続き、各委員会等の活動に関する「年度計画の発表」、「年度末活動報告会」を実施する。
- ⑪ 引き続き、一般科目と専門科目の教員間・科目間連携を行う。
- ⑫ 引き続き、学生との意見交換会を行う。
- ⑬ 昨年度、JABEE継続審査を受審し引き続き認定が得られた。今年度は継続審査でC判定だった5項目を重点的に取り組む。
- ⑭ 卒業までに8割以上の学生がインターンシップに参加できるよう、特に4年生でインターンシッ

プに行けなかった5年生のインターンシップを検討する。

- ⑮ インターンシップ重視に向けて、企業との対応者は進路担当である学科長と連携して学生指導を行う。
- ⑯ 熟練した企業技術者を非常勤講師として採用し、エンジニアリングデザイン教育、特に4年生の創造工学、専攻科生の工学実験の充実を図る。
- ⑰ 無線LAN等を用いた学生用インターネット接続サービスの試験運用の場所を1ヶ所から4ヶ所に増設する。

1-5 学生支援・生活支援

- ① メンタルヘルスに関する講習会等に教員を派遣する等、支援のための知識の獲得に努める。
- ② 「こころと体の健康調査」結果を活用するとともに、精神科医や臨床心理士、カウンセラーと連携し、メンタルヘルスに関する取り組みを推進する。
- ③ Q-Uテストを全学年に適用する。
- ④ 体罰、いじめに対するアンケートを継続して実施する。
- ⑤ 就学困難な学生に対して各種奨学金等の周知をし、授業料免除制度及び就学支援金等について学生だけでなく保護者に対しても周知を図る。
- ⑥ インターンシップを就職と密接に関連する取組と考え、その業務の各科の担当者は学科長と緊密に連携し学生指導を行う。
- ⑦ 引き続き、就職・進学したOB・OGを招いたキャリアガイダンスを行う。
- ⑧ 「高専女子フォーラム」を活用して、キャリア形成支援について検討する。
- ⑨ 3年生と4年生に聞かせている5年生の就職・進学体験を、1年生、2年生にも聞かせることを継続する。
- ⑩ 地元企業合同説明会を本校で開催する等、地元企業への就職希望者の支援を行う。
- ⑪ 学内ホームページから企業の求人票が見られるようにする。
- ⑫ 女子学生の就職先拡大について検討する。
- ⑬ 進路支援委員会を中心に、学科1年から5年生までを対象としたキャリア教育の計画・実施を継続して行う。
- ⑭ 進路ガイドブック等の冊子の作成と学生への配布を継続して実施する。
- ⑮ OB・OGを招いて在校生へ行うキャリアガイダンス等の講演会を継続して実施する。
- ⑯ キャリアカウンセラーによる就職活動のサポートを継続して実施する。
- ⑰ イノベーション交流プラザの3Fを寮生の夜間の自主学習場所として使用できるよう検討する。
- ⑱ 屋内型の「学生の憩いの場」の整備を検討する。

1-6 教育環境の整備・活用

- ① 防災調査への対応をリスク管理室、安全衛生委員会、安全教育分科会で引き続き行う。
- ② 教員の研究室、実験室の環境巡視を安全衛生委員会が行う。
- ③ イノベーション交流プラザに学生の自習室を設ける。
- ④ 試験期間中の日曜日の図書館の開館を引き続き行う。

- ⑤ 今後 10 年の施設整備計画立案のため検討部会を立ち上げる。
- ⑥ 校内及び宿舎敷地における交通・駐車マネジメント計画を引き続き策定し、環境整備に努める。
- ⑦ 校門付近における自動車・バイクと自転車・歩行者の分離通行について検討する。
- ⑧ 組換え DNA 実験安全管理規則の運用を引き続き進める。
- ⑨ 高専機構発行の” 育児・介護の支援ガイドブック” の説明会を開催する。
- ⑩ 男女共同参画に係る取組を支援する環境を整備する。

2 研究に関する事項

- ① 引き続き、科学研究費補助金等外部資金への応募のための学内ガイダンスを実施する。
- ② 科学研究費補助金への申請率 80%、採択率 40%の達成に向けて取り組みを強化する。
- ③ 科研費塾、科研説明会、申請書の事前レビュー、応募者に対するインセンティブ付与等の取り組みにより、申請率や採択率の向上を目指す。
- ④ 鈴鹿高専テクノプラザや産学官連携コーディネータ等を活用し、産業界との共同研究・受託研究の受入を推進する。
- ⑤ SUZUKA 産学官交流会の場を活用し、本校の研究紹介等を行い、企業との交流を深め、共同研究への展開を図る。
- ⑥ 地域交流事業に貢献した教職員に対して、ポイント制を採用した地域貢献助成金制度を継続する。
- ⑦ 特許取得を奨励・支援するため学内における知的所有権に関する認識の向上を図る。
- ⑧ (独) 工業所有権情報・研修館 (INPIT) 募集の「知的財産に関する創造力・実践力・活用力開発事業」展開型の採択を受け、知財人材の育成のための教育を一層推進する。
- ⑨ 鈴鹿市主催のリーダー研修の講師や三重県産業支援センター主催の産業技術人材育成事業の講師を務める。
- ⑩ 鈴鹿高専テクノプラザによる技術講習会を開催する。
- ⑪ SUZUKA 産学官交流会において、研究サロンやフォーラムを実施する。
- ⑫ 教育委員会や小・中学校と連携した事業、オープンキャンパス、公開授業、出前授業、ものづくり体験教室等を通して理科教育の支援を行う。
- ⑬ 科学技術コミュニケーション推進事業「ネットワーク形成地域型」(企画名称：地域産業が育てる未来の科学者「みえサイエンスネットワーク」)(JST)を推進する。
- ⑭ 鈴鹿商工会議所主催の「鈴鹿少年少女発明クラブ」(会長：鈴鹿高専校長)を通じ、小中学校と連携し小中学生の発明力の向上を支援する。
- ⑮ 共同研究推進センターを中心に、地元企業との連携教育・研究の活発化を図る。
- ⑯ イノベーション交流プラザ内に、地域児童生徒の理科教育、地域企業と教員との技術情報交換の場を設立する。

3 国際交流等に関する事項

- ① ドイツの高等教育機関との交流継続を目指す。

- ② 3校（アメリカ・オハイオ州立大学、カナダ・ジョージアンカレッジ、中国・常州信息職業技術学院）との交流協定の下、その交流を推進する。
- ③ 引き続き、アメリカ・オハイオ州立大学へ教員・学生を派遣する。
- ④ 引き続き、専攻科学生を語学研修のため、カナダ・ジョージアンカレッジに派遣する。
- ⑤ 引き続き、中国・常州信息職業技術学院から、教員・学生を受け入れる。来年は派遣する。
- ⑥ 機構の海外インターンシップへの参加を推進する。
- ⑦ テマセク・ポリテクニク技術英語研修への参加を支援する。
- ⑧ KOSEN ROBOT SHOW USA(KORS-USA)関連の取り組みを実施する。
- ⑨ トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム等への学生の応募を推進する。
- ⑩ 全国国立高専による私費外国人留学生対象の3年次編入学試験の実施に協力する。
- ⑪ 留学生の学習補助や学生生活全般のサポートを行うために、同学年同学科の学生をチューターとしてつける。
- ⑫ 留学生に対し、日本語を読む・書く・話す・聞く能力を高める授業を継続して行う。
- ⑬ 専門教育の基礎的な部分を補うために、留学生の個々の学力を確認しながら、2年生までの専門科目の補講を行う。
- ⑭ 東海地区5高専に在学する外国人留学生に対する研修会に留学生を参加させる。
- ⑮ 留学生関連行事として、実地研修旅行、校長との懇談会、進路支援相談会、留学生交流会、ホームステイ、小学校との交流を引き続き実施する。

4 管理運営に関する事項

- ① リスク管理室を中心に学内の安全管理に取り組む。危機管理マニュアルを見直し、周知を徹底する。
- ② 学内ネットワークの円滑かつ安全な利用を目的とした学生・教職員向けの講習会（セキュリティ講習会等）を継続する。
- ③ 学生・教職員の安否確認システム（「すぐメール」）の登録及び更新を徹底する。
- ④ 内部監査体制を改善し、他高専と連携するなど監査の強化を図る。
- ⑤ 公的研究費に関する内部監査マニュアルに基づき効果的な監査を実施する。
- ⑥ 定期的に不正使用の再発防止策の取組状況について調査を行う。
- ⑦ 教職員を対象とした公的研究費等に関する不正使用防止に関する研修会を実施する。
- ⑧ 配分を受けた競争的資金について内部監査を強化する。
- ⑨ 教職員を対象としたコンプライアンス意識向上に関する研修を実施する。
- ⑩ セクシャルハラスメント及びメンタルヘルスに関する講習会を開催する。
- ⑪ 事務職員及び技術職員の能力向上を図るため、地方自治体、民間等外部団体主催の研修に積極的に参加する。
- ⑫ 事務職員等の採用・人事交流に当たっては、近隣の国立大学法人等との計画的な交流を実施することで多様性のある人材の確保に努める。
- ⑬ 平成26年4月28日制定「高専間職員交流制度実施要項」に基づき他高専との人事交流計画を策定する。

- ⑭ 再雇用制度を有効活用するため、その運用方法を絶えず見直し、これに基づいて運用する。
- ⑮ 機構の提供する IT 資産管理システムにより、ソフトウェア管理を適正かつ効率的に行う。
- ⑯ 高専機構本部等が実施する情報系の研修会に積極的に参加する。

5 業務運営の効率化に関する事項

- ① 従来予算配分方針を見直し、予算の効率的な運用を策定し、運営費交付金の縮減に対応する。
- ② 管理運営に関する各種委員会の再編による効率的運用や事務組織との緊密な連携により、一般管理費の縮減の節約に努める。
- ③ 新規事業の開拓や既存事業の新たな発展に向け教職員の積極的な参画を図るとともに、外部資金の獲得を推進することで一般管理費からの配分を押しさえる。
- ④ 光熱水量の使用量を平成23年度から5年間で10%削減を目標とし、一層の節電に努める。
- ⑤ 現状では一般入札に対応することとしているが、引き続き随意契約を行わないことを徹底する。

6 その他

- ① 宿舎の跡地について、駐車場整備五ヶ年計画に基づき整備を進める。
- ② 教育・研究・管理運営等の業務において、鳥羽商船との連携強化に努めるとともに、第3ブロック内の高専との連携の在り方を探る。

鈴鹿工業高等専門学校運営諮問会議規則

平成 27 年 12 月 9 日
規則 第 100 号

鈴鹿工業高等専門学校運営諮問会議規則

(設置)

第 1 条 独立行政法人国立高等専門学校機構鈴鹿工業高等専門学校（以下「本校」という。）に、本校の学校運営の充実・発展に資することを目的として、運営諮問会議（以下「諮問会議」という。）を置く。

(任務)

第 2 条 諮問会議は、次の各号に掲げる事項について、校長の諮問に応じて審議・評価し、校長に対して提言、助言又は勧告等を行う。

- (1) 本校の教育研究上の目的を達成するための基本的な計画に関する重要事項
- (2) 本校の教育研究活動等の状況について、本校が行う点検・評価に関する重要事項
- (3) その他本校の運営に関する重要事項

(組織)

第 3 条 諮問会議は、校長が委嘱した次の各号に掲げる若干名の委員で組織する。

(1) 学外委員

- ア 高等教育機関及び研究機関に在職する者
- イ 産業界及び地方公共団体等の関係者
- ウ 本校の卒業生
- エ その他本校に関し学識及び経験を有する者

(2) 学内委員

- ア 校長
- イ 副校長
- ウ 事務部長
- エ その他校長が必要と認めた主事

2 前項第 1 号の委員の任期は 2 年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(議長)

第 4 条 諮問会議に議長を置き、校長をもってあてる。

2 議長に事故があるときは、議長があらかじめ指名する委員が、その職務を代行する。

(諮問会議の開催)

第 5 条 諮問会議は、校長が招集する。

- 2 諮問会議は、少なくとも年 1 回開催するものとする。
- 3 諮問会議は、必要に応じて専門委員会を置くことができる。
- 4 諮問会議が必要と認めたときは、委員以外の者を出席させ、意見を聴くことがで

きる。

(守秘義務)

第6条 委員は、その役割を遂行する上で知り得た情報を漏えいしてはならない。

(庶務)

第7条 諮問会議の庶務は、総務課において処理する。

(補則)

第8条 この規則に定めるもののほか、諮問会議の運営に関し必要な事項は、諮問会議が定める。

附 則

- 1 この規則は、平成27年12月9日から施行する。
- 2 鈴鹿工業高等専門学校外部評価委員会規則(平成16年9月6日制定鈴鹿工業高等専門学校規則第67号)は、廃止する。